和書門
類
號 二〇六三〇
函 二九
架 六
冊 五五

内閣文庫
和書
類
號 二〇六三〇
冊 五五
函 二〇三
架 五

内閣文庫
番號 和 20630
冊數 55 （50）
函號 203 25

四十七

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

林氏藏書

日本政府圖書

寄生　私年立ニハ廿二三四歳ノ事歟ニ

花鳥ニハ廿一歳の夏より廿二歳乃

春まてとあり

年立ニハ廿二歳ニ
廿三歳　中納言

私是ハ早蕨の前年より此巻

歟ニ

藤壺女御の腹女二宮ノ事

同女御卒去依し女二宮御裳

着延引事

淺草文庫

同十九日為後廿二宮菊合事
秋来紅葉廿二宮藤壺御使人
菊り
与源中納言并基紅葉事
夕霧左大臣六条御事　右大臣
とりけるをはあやまりなり
按察使大納言和歌内宴事
此時按察大納言は右大臣なり
然ともあせちの大納言といへり

時よりさらに宴は中　年紙
国にしけまへるによりて身の
官をとりける也按察使大納言の頭也
年五十八九十三歳とて
九十歳　中納言
松花宴には廿二巻とあり　強抄　九
同左右早蔵同時也
夜廿二宮御除服賜事
御門以廿二宮欲令嫁於源中納言
給事

源中納言不忘故宇治所思事

夕霧六君可嫁兵部卿宮事

下為八月夏

宇治中君自五月比懐孕事

八月源中納言折槿花参二条院華見中君事

此次第〻相語事

十六日兵部卿宮嫁娶事　左大臣

六条院東対装之〻

二条院中君独詠歌事

明日兵部卿宮奉文於六条院事

与二条院中君消物語事

六条院消息事持参〻継母宮

宮文云〻筆事

兵部卿宮出六条院給事

三日夜餅事

源中納言出六条院給ヘリ
源中納言宿按察使君房給事
兵部卿宮文書入六君給事廿一二
歳云々
兵部卿宮出二条院給事 跡
有事
中君書文於源中納言ヘリ
可出宮給賜事
又日源中納言参二條院行事

隔几帳對面事 押入母屋中
不及實事明日書文ヘリ
兵部卿宮渡二条院給ヘリ
姫中君於手奉給ヘリ 二三日
扇賜事
源中納言送衣裳於二条院ヘリ
源中納言常奉数書 於二条院
事
源中納言又参二条院ヘリ

一籠中ゝ表居僧座狭事

中宮清於手習宮事ゝ於源中
納言為几帳宮形代也
九月十余日同源中納言之山寺治
文事
右出弁尼寫西也　下阿闍
梨作法忌日経供也
壊宇治故宮可為寺也
源中納言其夜留宇治安弁

尼昔物語事

源中納言同形代事　於弁尼云々
妻中ゝゝ事
右文ハ子母曰中将君云々　後為陸奥
守之妻　陸奥守又為常陸守云々
廿歳二十許云々
於宇治打蔦紅葉献二條院
給事　兵部卿ゝ文見之中宮
宮之文返事
菊蔵兵部卿ゝ文与中宮合物語也

夕當大臣参二條院給了

年三十八にて
廿五歳　正月任権大納言兼左大将

自正月廿日中宮臨賜事

直物日源中納言任権大納言兼

右大将事

参二条院有拝舞了

於六条院設大将饗事

式部卿宮渡御

二月二条院中宮御誕生男子事

御産養事　碁手銭事

廿日条前斎宮廿二夜御産養了

又日大将参条給事

御門賜御文、お大将母儀入道文

事

宮君五十日事

大将参二条院給見宮君公行

事

三月晦日御門渡御前斎宮事

葵花宴ノ　御檜扇ノ

御扇ノ　立文基講

大将賜天盃事

和哥事

詞云梅壺ニ大納言はまれしうつゝ御

めもえ人とおもしらうこと

此梅壺ニ大納言も紅梅の右大臣丈

此人女二宮の御母葵上女御ーと

こゝろけてうれつの肌のとしく

まては女二宮を亀はしく

思ふ人見られは女三のち

の大納言といふこれ紹し母の

かまいは物語の家よめくめり

其後女二宮退出大将三条宮へ

四月大将出家治遂御堂事

女院存日女り長居さる下向

大将恒例ノ人事

大将須長常陸守母傳しり

寄木　或寄木以類為巻名　秘

花頭といふ山木にやとりたる葛乃
名とあり

（河）
屋とりきと思いてすハ木のも
との旅ねもいかにさひしからまし

一名魚鳥

私此名花鳥秘義ホ委沙汰之
うかよりハ朽もやしよりきと
さけきを分てたかみ尋ぬる

（花）尾より末ハ弄なりあり詞なりと
三山末よやゝうらさる葛かん尾とあ
ありやうゝきこハ末比死やといふ趣へ
菜よ寿寄生とてあり寿かん
末々生す又楓乃樹ゝまゝ生すつき
を尾より末といふハ末に似てまゝ家
抱なきハ名をうるそこいりすこと
とのやうりきよハあり法家なき
薫廿一歳の冬より廿二歳まで

春まで此まゝあり二月より直物
の次よ任大納言兼大将のよし
見えしより
（并）此巻薫廿三歳より廿四歳まで之
並ありさましとも以豎横相交
なるまおもぶきなり例あり別
注し此巻推本此末より総角
なりハ宮乃月（周イ）忌の事あるし
年比より薫乃春なと此まゝ

りけるに次の年にうつりける卯
月まで此の文

秘
巻名以哥号之 薫十七より十七又の
年まで二ケ年此中にあり御年は
十七歳巻よりはおのゝ之桐壺此巻
よりはけれ十七歳のこともみえ
まり来あそてみしより地してあの
事をつひに空蝉の夕顔若紫も
むかしの光四歳の年より此事

をさてまいは源氏の母も此事あり
わかるゝ也此巻も前坊廿二の事を
いはんとておもきも此事をとの申也
古礼物語の例なり　義

義
帚木は帚ノ一字ツモやより
来とよめりて来りけりゝる
をいふて葉帚木ともいふなるべし

う乃比哀つかしと申て中にも本枝左大
臣とのゝ帯ありけんおもしけるを
元
行川きてまて夕霧左大臣の精する
よし見てしらり此杉かりしよりさ
まよう世まのへ中左大臣をいへ里
う此人雅とも見へしまて京図まれ
菊大宮女御　大殿御　修理大夫の
又と見へしより今とい若菜下り
位より一つまなき妻女とさもしくまれ

それよりさき此本あまたへし
此後華園の世涛ハ東家の内証とて
余り翁しく廿二家をとしまへまで、
廿二なとハ董心大相伝家より始まる
人也

左大臣
大納言
御理大夫
前華道寺

梅かえの左大臣若葉上のと此人
なかりし

花左大臣ハ西てうかハ菜園ニハ梅かえの左大臣とあり
あやまりなり行幸より岩二十六二の左大臣

此二人帝の歌あり古今集にハあまた
今上天皇此帝時より

余り翁しが明石中家より左る迄
あひきと廿二家わかりをとして
さはりり世行しよりし尾上
きこえかんしより梅か香てまへ景樹
ときこえしし三君此人ゝや
抄
左大臣の三男也　藤原家けし寿せ
是明石中家よりもまやく余り
あくつまて又此左大臣ハつかへ菜園
まハ梅かしの左大臣とあり誤也

行幸よりみれは上まくの
た大臣也 義
弄 見京圀三君麗景殿 按ちえ
のむすめは明石中宮にあつかひし
人〻乃ちらなりくし
義 了此流といへ家は権中乃婚なさ
しておくへし故た大臣（ヒダリノオトヽ）との
ともへし行幸よりての葉
上まて此た大臣之

まこと春宮と成たらしさせし御
秘 帝となりむとめ代当とてまつ連
家事也
義 今上春宮此御時のこと
人よりまさ給は
義 明石中宮よりもさきなり
中宮よりハ宮さらさく
秘 明石中宮也
義 当此事といへとも明石の女御当時

十文字なれはさくいふなり
ちゝら
義 多もいはれても同し
廿一や一とこそ
義 今とも廿二文字也
またいとくちおしく
蓮華世界の心也
六此文字をさまいふ未来永々なりとき
むなり

秘 廿二文字之
御くちもいとおしく
義 廿二の文字はゝちよしとも
廿一文字を世まうとひする物なり
義 明石中文字勝也
ちくおく此法ハ男わい
秘 又左大臣也
義 故左大臣摂政なりせし人にて
錦帯あるとも也

ゆくしきこと也けり
秘 女御のなりて侍りしく
十四よりなかまの人としは尚きせさせて
まつり給
秘 廿二ときも
はさつりさりけれとさかしう抱
義 左大臣乃く
女院夜ゝ人抱のけさまつゝ給てつゝそ
りかくして失へ給ぬ

秘 椎本の巻之薫朝臣とゝみや宇治へ行
のゝ御つかく
義 宇治の大へ君よりもさきにおはすく
内りしも御わかれけるく
今よ也
さうゆし式女官（にくわん）ありく
義つかれ女御のたき母給へきよし
ことの給也
文いまゝてまうれはんらま

抄 廿二文之　箋

へくわしくありけり

今と九けん文

は四十九日すくはさとり

廿れの七七日也

箋 目しとりまうをあいはし

ことし毎日廿二文をとこふをひとし

まふや

をらびきとやすの

抄 舅也　外戚より云る人をいふ

大藏卿すりのかみ

抄 諸左大臣乃息前つきの兄弟也

すりのかみは修理大夫也弁

箋 此二人廿けの別腹ととて

はんひとけなりあし

ことし上の母一んより打絶ゆ

あけかふ之

えさまの菊うつろひたて侍り

なりけり

(花鳥)秋まて有て時しもあれ菊此花

これなりしに宮の御さまに

(秘)うはなひきてましてやうつろふ

うつりは色此すけの夫の心也

まつこれはことに

(義)時節の宮比あはれなるも此廿二

宮を主上の御譲りしてこそ候

給也

これらしとおもふ事こそしかし

(義)主上の御後見しあるべし

なからひはおもしろからん

(弄)ありもつかしと也

私なと我なからんと也雖然也

しとの御事也

朱雀院の姫宮を六条院にゆつり給ふ

其ためし

(秘)女三宮此例をおもへり　義

しりいひてやあらむとも思ひかけは　さらく
もおもひなむしと
花
朱雀院の女三宮を六条院へ
ゆつり給ひし御わかりてもおほしは
とおふ心なかのそにおほし支
かゝりしこともありけんと覚しつゝ
りしも薫大将のかしかせ給ふく
とまうしろつしは侍るを傳る
とみえしちへきとなきさもなしとあり

秒
宮まちあつからにけしのみなけく
ときとおりしとおもへと薫の
女三宮もおほし給てしゆほにわし
も尼になりて侍るをおもとき　翠
翠
女三宮を六条院より給ひし
御さなくとおもへとつひし
しおほえいよりしとを

はんしようかなりのまかし
義 廿三の御身は上て不定也といふ御事や
まうへはともあらんとて
まうくをはらんするせうや
義 廿二文はうちを今上は位の初め
まやはらしろをとさせさため申
とおかすなる
やうそうはつ井ての中なり

花 朱雀院廿三文を六条院より御
法のまへにしらはつゝいてのまく
なり今上は廿二文を薫中納言
よりつ申まいらしは 被にしめ
すなり
抄 廿三文乃例 おなし文 弁 義
弁 御はし上をほよ人りうとて
おもしろく人ありとおほしいつり宇治
大蔵いまさら寿生時に 大ゆく

ちよ人をまつりしも廿二文字
なとに集りてきくふくあり
とらかせ七寺かゝし哉性を
み本たいゐへきましく
ちよ人ありしも廿二文字なとゝする
らよ志つそまつかし哉心なりと
薫乃性を御縁人とられ古ゆゐさ
ゐ文 義
清井まいさめりのりなくてしを

えあし
抄
本意をしらていか所哉しまし哉と
夕霧の六義あとみのなかし
しれゆきに時雨あし哉
義 涼月まくれて時雨もありし
ゐ哉也
花乃名も夕をえしゝな
あかりに家筆など
中つきのみこんつきの力へと中納

言源のおほんおとゝ
上野のみこハみかとの中務卿なる
今上帝の御子也中納言源朝臣ハ薫
大将之御おほえて人をめす時になる
うめの人也官姓名を奏する
事之義
秘 中務親王ハ今上の御子也上野親
王ハ當代の叔王にあらす 義
中務みこ今上御子也上の御きの

みこ二人ハ中納言源朝臣ハ薫之
また上ハ中将也
うちよりくたりてめし出すも
薫の御用ありさまよと云也
ゆふの時なつのよりてに
秘 勅語也 ありし事御也
あらひなとすさ御心ところにて
弁 若菴てのまへ
秘 若菴のてのまへ御所之簾下

いうしきや

花 世二亥は毋女海の内里り共打姫
かまはれ掛代壹なしれすさましく
似あをあゆくよ御碁をと終り
め給ふ

いてはしにり紙をとる女のれりてこ
連飽んようりへ來とそみちんめし
いてはめ乃り紀えりしめしよら
ず

花 文集十六送春唯有酒銷日不
過碁として此詩の心ばへをもていひ
よろつにはをくくるなりといふれなん
よりしへ來たり

義 碁為消長夏とよめり

河 銷日不如碁

延喜七年正月三日御記 朝覲行幸之
大后未日還御之時可寂寞
宣囲碁持懸物有好馬則碁

為式ア卿親王与左大臣基間
内廐別當春野牽鹿毛御馬
立庭中一局給左大臣賭

いつとなしにあらく
薫をいつよりもなつかしく
しのふくやきみによそへられた
かはいまさの御下心此事也
よきのり物はありぬへけれと

河
賭 ノリモノ カケモノ

花
のり物はかけ物也御門の御碁あり
まけさせ給つゝまけ給女を薫は
給はんと思しける御気色なるの
あらわれたる也

弄
女二宮の事をおもはしくれ此
まつり

のけ物也賭字賭弓なとつかふ也
女二宮の御事をおほせめしこそ
あるや 義

うかしくいえまうくまてゆかし身
（義）廿二字此ま を作らるゝ文
三字をとりてひとつ
（義）蔡二字乃内主上二字此者貴文
中川にて此花一枝ゆかりとて
（花）先此花一枝をと作りまてけるの
ありおもかう清詞 朗詠云
閑得園中花養艶請若許
折一枝春 義

おりて折としろき枝を折りつく
（秘）薫下葉して萌を折るゝ文
（薫）よのつね此垣根にありて
心のましに折りてみゆきくなしたし
（秘）雲上乃籬をさそりさるゝ文 義
ようい わさりしすみ申
薫のさ面之
（化主）君まあへきとう梅ふ園のさくなりて
乃ちり此文をあせ限とみゆれ

花

延喜の集時雨川くれゆくのへゆん

花ならて霜の色より猶かなしき

続宣集につきて世にもへより番

杉なれと緑の色みあせたるとあれ

と葉廿二字乃さのむかけまりとく

とまくへるのをやかんいらなりとも

やすき波へまへるなり

秘

廿二宮ハ母々のもなくてまし海

まいにしてへるり并

義

枯なハ園おかハ菊く母々沛しと

園よりしてへ廿二字とハ菊より

流して流しまへなる

杉りくかのめさせまつ

まよ此虫よ葉へより心気ふと河

なるなり

まいれんのくせなまは

秘

葉のんくせ之義

いてやかいまとおりすさ由くまりいと

おしきくつし乃御事とあると
花
中院を帰院はまうかたりなと
のまゝしまゝとあるをまうし
事なり
秘
廿二家も中院にはかはりすくなしと字
治の大君は中君にゆつり給
ともゆるしてあまたある義
あはれなりし紙はかくへきを
人なくはゆるさるゝ也

義
廿二家へ人紙給くすゝみもなれは
と也
きはあらはまかせは
弁
廿一家なりともなき也
秘
おほしくいふ也
あまりにあはれなりけれは
薫のあまりあるんつひとりと
辞してまいり
たゝ大臣とのあれきて給はく六君も

されとも此巻にしては

花 夕霧は行末をかけた大臣なり
然とも右大臣はあやまれるなるへし
若菜下の巻に帝乃文にまかりけるく
よりて志りしもの此大将
といへりや

秘 古本作右大臣これも委子細あり
但抑左大将之花宴ノ義に依
ま反へりて読之夕霧は右大臣

義 なつかしき明の事之
薫より廿二ヶ年を語りける事
とききこえて夕霧此名ふる心也
一本六条巻とあり又は六巻也
かりもかりいつまでも夕霧の
六巻の事之
なかばより此巻を紀なりけりとも
自家の六巻を大かたにおもて
ともおかれたるめんとも

あらはしくやうさうかんとても
河 伊勢物語云蓋ここのとおなじ
世中ていひけれはなにとなく
あやこりこみよ成りけんなりも
らはしとむすひ物を
貞信云 はるみをはこよひ此寺につれそ
めそ世をとめまてとなれいさは
花 あらはすまいる浅不通と云
本文に見えぬは定家卿しく

すゑのまつやまをとつゝけたるも
といふ心をとられさらくへとも
こにとらんは見えぬなりけりね
やまなる中らひなりとてもこ
のましからぬものとふんて
秘 うはめ代もせさらんへとなれせと
どうしや感のいなしきりとて
下臈なとをたてさらしも見えけれ
あしとよ代まりおもあしいはこゝ

宮なりしとおほすや　義
打紙しきていは
弄　白薄やうなしていむこはりとう
しと也
みやこにむこうわしめのま
義　夕霧めのまへ世二文此事也
そうらう帯にの絵て
義　主上此事を夕霧のそう侍
まのまふとも

中宮をもおもやうにしるしみ
秘　明石中宮をもさとこのふ之義
弄　白文此は心は入め紙明石中宮へ
中のふて
きこしめしつけて
中宮の御心也
ひとつしくおしき
秘　明石中宮　白文を真訓也
まゐて

みこゝろハ流らしろミこゝろしくも
義
親王達ハ流石威ありき又情ありしろ
これ様ふよりて流位なることなるつ
まへの事也
うへハ此世も末になりゆくと
秘
甚深なりもかしおかすし
さへ人をは一ことさらとかりめまハ
凡人をは女事一所ふて又いかの
おしまへのあれとぞ　花ハ句

言中恩をもちまへハらく乃
のよく
りのおとハまめこちあしこ所さう
なし
花
夕霧相ゝ乃雲井鴈かし藤葉
家と二ことはりて、まるへき
事也
秘
夕霧ハ実法をとそすへと雲井
の鴈ハ和なり藤葉ハ家てかゝ

ますらを

義 夕霧は雲井の雁藤葉に委敷

内侍のすけなともある事也

かくて夢てきこゆるゆめもなくて

弁 東宮ありしと也 秘

義 春宮は御即位の後先ゝ儲君と

おはすと也

まうけのきみとも申なりてもあれて

いとおほさなし

秘 白玉のゆへ也 義

ことうらみしけるおもひありしこ

めしまて

秘 夕霧乃ますらをなり

弁 夕霧ふかく思ひいれまいらせしかのこと

義 夕霧の雲居にしもみそめたる

雨ふりいさりしてすまひを白玉ありしとなり

家さくおもひぬこと

おもふ人大納言乃

抄 當時太政大臣也右大臣より任ぜら
心ゆるされよりておかせんといひつ
けらる官をとかはり 義
弄 被任太政大臣二男和秘右大臣行所に
右大臣と也以前のよし大納言
といひつけらる也後太政大臣のよし
むねとあるなり

あるじいの流るとも
花 梅宮大納言也廿六中宮亮事なり

和梅寒はせうと読てはいやまし
と白家の親しき也 但梅宮
大納言は此海右大臣之猶子となる
梅宮大納言といはれしと見
ふるき白家は中宮をなかけ猶
（家はよりてかれ此官とつけられ
抄 和漢の作者此翰也
萬葉第一の作者廿ま四種の勝也
右大臣のよしむねと也 義

老の年かゝりぬ

弁
子厳の奏此事と知へし

抄
葉廿三此年の終ありけれなれの
年より前々之義

私此叢より年は葉九三歳あけ
ゆあれの年と同事此前奏は
葉九百歳早厳の奏ゆれ
ある

廿二言も此ゆへそめ奏ニハ

抄
廿四首此序之

私子厳ニハ葉廿四首乃奏を
入りとと奏るも此詞よりいさ奏の
事くを此年かゝけれぬかと奏る
詞と此廿二言も此ゆへそそぬ
まことに詞の中間を早厳
の奏こゝけ前之
さも奏とこしくそいと

弁
葉此事

義
今上此ゆん之葉の廿二言ゆゑ

法事をとりおこなひそなへまゐらせ
しまゐらするよしや
つけ奉る事なくて
主上此法文をも蓮如上人の君
家也
おほしおこしてかんめしま
いらせ給
蓮如の文庭にはおほせあんなり
ちしらす紀やかれ

秘
御かは法中にしありてはた弁
私主上よりおもむき給人家
事をいれは方論此事と云
なる也
笺
かんつりに比丘八紙もかんれと
蓮の心より主上の法法と答
めし定らる神を法主あまた
かん文
すえまいらせしくの

秘
宇治の大君之義
こそく扶山く
義
扶り山くとい何と山貞宿縁
やうんミうれぬ事をいふり
口訓り貞志那まりとも北流あり
さ毎なり
秘
惜大君ハ似すへからしと也
秘義如何大君なり似すへくも
云云と也

義
しき毎のまゝとうく口貞序也
むらしえきんみり此猿
河
反魂香　前勤
風むことす几くさ毎なり
薫のんなり廿二のまゝ此いそ
うきあへ
右の大君なりいいそきうらく八月
もりつまふと
秘
左大臣夕霧也　子蔵矣の八月也

此ハ下白宮ともことよく共

義 事ゝ弁

八月十六日ニ白衣ともことより

しと

二条院の御こ乃流さき

秘 中意く

義 守治中ゝ意之

いそうい殺あるのありさ而

中意此身のことをいふ也

あさなゆふなと

白衣の法本性乃事也

めくりあひてハ

義 法しむかひて也

みえくにゝかりゝ西のんれと

秘 此種類かれもなきしにとも

津ゐりゝ山ときみくゝさき

秘 ささし山をきみを任せてさとも

私此白衣のかれしたり成語

宇治里へ立かへると文
風そ涼しおかしかりい山の川
のまち出まし
花
二条院へむかへられましして花の
まし山よとらせうかとおかしなる
とつて又う絶よりも絶山里へ
古ゆかんいへまうへかうへしと
のまうさ　義
山の川花まちかんを

折しもくる月なかり
宮乃まひときしまえりしから
ひらく
此方の言之りしのまひときし
まへ
草花りと流の松りし帯か
花
草のまゆいは蓮ゆもとのすみを
おしすん又此頭も相つきのまそ
みをゆり

抄
古のやまとうたといへり相つたへの
来たり此説あり
心乃うこきいつるやまと哥
以
ことはのたねなん也
抄
心の不動なり
箋
大君はもしく異れなる様よ人の
たゆしをとこへは斉特なる性也
と申君のおほんす也
も世ありてもなせまりしは人

ゐやし
抄
大君此事　薫の心もゆめゆめたまふ
何れなる也
まうろしくいとかうていうくはれしれ
しいと
箋
男はさ此事れの物事もしとのかれ
薫もしを志とらすこさたれも
おほんとしつゐやうし也
わかうすきの情ありてそ

弁 婦若これさへすりよ娘てかはいせもの
しらぬ中若これをきいてよ嫁く
くる事抱へるをいやしき
私さらはまとい花の事之大宗
為生あてまし清すとも花
りておいさんと男子也 花
なれけとも我をいふ
秘 八文大若も云り 義
何かひなれ抱り

白文へいとふあふ言し其をも
かんそそてまつしさらとも
文いつ孫よりもあられたり
秘 こと方此ものいてへ言遣は
なりらしく如ひまかへ
弁 ことらさ此ものいそてへ其よ中
若氏いとわしくふら孫も
義 白の下人ありて孫くふ文
まいゑめさな

秘 懐姙事之弁 義
あはれおほかれはかくれなきすかたなり
と也
白文懐姙の事を見んと思ふ語は
しく男は氣乃有て中に居るなや
ありしまゝとうそ
はらみ人ゝよりやよりけれ
義 白此さすり不當なりいへる
懐姙の人にかりさやかなりと云義と

の語なと也
八月(ハツキ)なりけりあまさいは此の日なれと
よりそ
秘 云君此事之弁
義 云君嫁娶のりかへより中
君此懐み語也
言はつきそんとそりいあり結と
秘 白云文はいらひ御しつくし
のうせ

私くけんとは本ほさの心
我といひ物んおして中者の
心なりしくてとくろう色
をまふを中者此心なりいの絡
そのもを律しくおほすとより
書にあるまし
志のひとつ中はなりをかぬを
秘 以下草子地をしたりていふり
私中者此心よ野紙つけく

と一服浮しーうえ
くりうりかひすしほか
秘 中者此まう意ほて後一日の
表られもなくなうりーのうえ
心なりしま見ほうりーよ
義 白此心なりとより表られの
あるんを心くうしきといとみを
しーと学くしてちとよ命うら
よなりりーのうえ

志乃はいときく河とのかとて
秘
あしかさんの家は清んなり
る○てよみあうりし事うしかるを
ともくつ事かさにし乃を
河
る○てよみつ事ん成あしかさそ
儀より題をおもかはするり也
私
中哥
秘
清きさあい中君は是
義
なかりのふをもって一向り

中君は月のとこさんとん
中よ宮としてかなり
私河の門哥は是んいるの○てつ
まんとなりしいさすして儀よ
物訳とはいする事とうしみとる
是は自家は為て栄くれを
なかり題をも中君はて
きこえりのとも是こ事とと
おりしうつけり

中納言家もいと打まさる
歌と
薫の中君紙ニ書文
あはれとおもひしとも
自此中君をあはれとおもひしとも
めつらし書なり此心ろへしけ
歳侍んなれいと文
世ゝをいと思ひこそ明旨
秘
夕霧のあさましき

義
夕霧のあさりをよくいふめし
きまへ
けをなりひ給ひそ
中君ありよられよなりなんと文
あいなしやまう心ぞう
秘
薫此我物めして中君紙を
きこしまいらせし此物なりと
なかりつ書物なと文
なかしにゆつりきこえしかん

義
白ハ中臣祓のあらたし事也
むかしの人て心をきよめそし後
秘
大祓といふハ
きよみをそへましき此人もよまり
花めけし
義
大祓とハ人祓つけそへしを
薫の道ハ此みちりそめしと也
そらし此流ことをのき
大祓此事也

人かんりともあらす
大祓此心ハすみしもかれるく
つくとあるきし也
一つとふとえさしきこつましく
一向り薫を敵却しいそ今も
いうくりして中臣ハゆつりまへ
高明り
去いふぬしにふ
義
中臣此事也

いそきさゝせりしかと
斎宮へ中将をあはせし事也
めしし物くるをしく
河 めくくしく 秘義
弄 いやめ別名云々
花 めしし夫と云詞幻夫とありとあり
又此夫此下の詞ありともめしく
拾ひけてともありめさましき 夫
心如へし又おそいは情字也 斎宮

とらくはまそいてそをまくは
事をこうまあけかきこ此中まま
あるまき也
みてありきし
弄 中将を斎宮としあはせんと叢の
そうまりく
秘 斎宮は媒中せし事也
言もさうまともぞ此引との言さま
斎宮も叢のあへ中将のるふ

此男なるへきよりそと薫の
こと也
花のおりは此事なとうけても
抄 この時の事なとも今はいかんかし
出かりも明りと也
義 浮舟は句は密通乃事をとく
(申)下此さ
程あさなかりしことよろみうけはり
やまと用かぬ人は女はさめゐとりも

あらす
秘 朋友の交へ給はへきまし也
あしさ女はれん心もちなと明り
浮舟はりおもえ給へりしさる
事も女の心もら弁のとます
一切人は色へなりつかわし
なりと
弁 薫は心より朋友なかの交も
交りなくてはいとふかまへるまし

私男女乃万めてたしすすあるかたの
人々ハ朋友ともたちとなり
もあはすとこそ
一ここに志ふかき心ありける人あいと
こよなくりしかへしくみゆる哉
委し
義
薫のまれとおもんをさとす之
私大君一人は薫乃心しりて
うはらぬ成けり白此流うへゆへ

委しくしくみゆると
云草子地之
その人々をむつましくみ朋し
秘 大君之 義
志此君みをかんかしくはと
秘 中君とおもふ君見此ゆへりせ
こゝへは思かなれなしとも 義
と侍りん人々をおもしと
秘 角総也ていあり

義
中君を大君と同し人と見る
あるへと薫ハ大君のくあひしうく
おもひとなりけるなり
義
薫ハうしむへきともいひけれと也
あくり此かをきてし消也代あう
へあへ也
義
中君を白雲なりあさせるへ也
まし也大君のうを給ひて白雲
のかつて如よひ行かさりし

哀ふ別してうく見るまへ也
人のうへさへ
中君此物かたりまてしすまてを
かためかしもとも也薫の心なり
なとか此をさひなし物をいひ出
秘
薫の心也
さなから此君さら乃わとなり打らのま
しるへ
弁
宇治の君さらく

弁
孫王なとは此女房を女三此のみこに
つねとりて又きゝ給へるなるへし
抄
女三宮此のみこときこえしあたりへまゐるなり
此宇治の君へまゐりたり 按るに
孫王なとゝもいへるなるへし 義
あんなとし給ふてもあるに
心つくしなくなるへしとこそあれ
此君の手より拘なとつましく
事を給ひけれて又給ふしや

よろのふなり
此宮されてとる 抄 清 孫なる貴
世なり
花
ねなおいつるのなまめきたる此花なれ
やあらはましきたくひなり
ならし
朝かほかはし 弁 義
抄
譬日及之在條垣雖晝而不
河
悟 注曰朝菌也世謂之木菫或謂之日及
文選歎逝賦

日及ハ朝夕ニ此名之
うつしもあへす
（秘）表かけてより次第〳〵
あゆくさ毎も
心の説よりさしつんたり
秘二条院ニ中院意ありすなわち
三条院よりも心よりあさまさり
（以）二条院乃中之三条ニ文よりも心な
是一つ之新義

文ハ東ねよりも内ありなん
（秘）白文沙葛也かくとも也
私白言文此比殊中意なり秋
これをあらしのよしとなり
さむれりの常いふ乃ゆゑさ此
（義）さもあまことい文常いふ乃ゆゑさと
中意文葉の類也
見しけぬさ花みと
集内ふ〳〵き見られは今朝乃

同みちよ
折りてむ此中なり
私庭上へおりまゝまゝとく
呂きり
ゑんさらいろめ見てまそまし之も
まいりのと
私天秋の宮衛也好きの人よ
いは似さうちよ
胡ふは年けしも世あるよ

秒
鍋鍬のゝつゝ此あかさ毎え
薫
言葉のまゝ此色てやめそんきくつゆの
来る毎てめてりうゝか花ときかし
私うくたうのくましや木見
物とみかしも折めそけさゝ
大慈此日ちゝ
弁
かつしう見世ともてんかしょみえ
里うゝ法花とさかしい折しそめて
つ柳之よとつふふんかゝゝ

義
上朝のかそと此盛もなく明ず
露ありつゝ朝は露よりも猶き
かなき花なりといふへし
とミなへしをいかんききにてそ
秘
好色のかことりハん色とまうしさ
るとそ
花
世節むらしとみ川にそゆ来
すゝ情枕とこ山ふし当てり
とふへハ今案朝かなかれまう
可申色をとハ故此氣ありしふかく
そへくしにりてあきハ常まきと
ミなへしハ色くしま花やん
名にたつをいはめ明かなりみなき
かへ可成へし
新
川舟　花寄
義
是ハ葉の性と花まても去う
なれ拙ありし心比とゝて世有性を
とめぬをいへり

鳴たるたくましきは露ちる地
抄 秋のあはれなり志てきひて露の
ふかくみえしうちさま面白し
女ともいひしとけなくあさいし
まつらんうし
義 白妙は松たちを海邊
かうしつまわたなと
蓋此月さえあかき海邊
朝ゆふをも海されくにきりと

むまつれは速（わやき）や
弁 うちまそもあし
秘 うちは及とす早鶴なりけい
妙評し
義 うち之此詞をうちまや うち之可勘
奥入云
こりうしともまうりく
弁 かうしともあけらへし
女房乃流華をひも

秘

此橋もとよりつりさくしめ房の

佛ぞとしもみしさると也

扨て勇の滅きまで

秘

其れより下車しまて

家の悪ひる所より

秘

白家の佛かつりと見ゆと也

まいのいとさ毎ことに

白のうつしなとの音のやとりい

葉のみれひいすしと也

心のあまりかさゆんまへ本也

葉の実はのつれへくやん

みつむく

あれよりさつへとゆかさせまよ那と

私葉の類也

しられみをのあたり

義

かり揺なかはらしも也

志たしくもえさつ可

義

細しのんと　簾也

数日記

ゆかいかんは湯くわん
内のめ房達なとゝ紫女
御おほそれとやこのくれそうし
（河）御画ハ女房なと居たる所なと
御方なれハつゆも此みた内にしなる方と
いふなと内家の房なとして文
（秘）薫の親の内へよりしさるへし
とも人々かとしハ薫のみつから
畢下しての給へせ　弄義

私此詞のつきむつましき故之
薫のやうなりのかう人々なとえさらて
けんよとかりかりやまとみ所ハ
御おほそれとやかて此くれとも
うしとて親なり居ましたり
其そも此よとしたらかえ
を帰らるもかれかりなるハ
かう人よね應しかる所とて文
に統もみてくれんかまへ反

秘
はんやはしくらしみたしき事
ものしるゝ也
私語んとは語んまじきとて也
打おしことゝに
花
あそこをはしあせ志ところ也音
通
打しくあらはれしもらぬ
秘
男こしき文義
うしそつゝ語しらしき

抄
中君此心をつゝましきもすこ
しらずしくらん也
なやましくおほさるらん
懐姙の事なを薫のといなる也
志かりすへきかしき
秘
六君此事をとらすへき嫁へし
弄　義
あやうふ世中此君やうや
秘
薫のよくなしへたし給く

おこと此兄弟のこゝろしる文
秘 まことありあつりしも
大君ありとし御かう義
らなやみあつらんとちら
義 大君此病中をとかむ文
くしきりしもしきかとりれ
秘 薫の初弁義
あとそたゆむしき母りをとも
薫の身とくよすれいう身

ふしそあしれ我身をとやくや
もそまつみれとの男なおかき
みそつるしとたとやされるも
心うしうあ大事のとかあらは
といひのつおへ
心うしうち大事もくやしき
みも
秘 うあしなみい大君此のこ中
きみとい中君を我物よ勢

はかりこと義

はかりこと井手とは
官位の望世間の事此外なとは
定まりたる事ハなけれハそれハ我
身にはかり此よりすへき物とうかと
さやうの事ハよくも兼て
はかりことはかりそめにもなき
葉のかけて
やりしあらみ其ゆくを

(秘)
(義) 槙をいつまて
船かのかけろふさ盛也
屋をさしこし入て
篷中へ船かを入る也
(葉) まきてそうろうりけかしはゆの
ちきりかをさうし船かのむ
(弁) 婦君にまきてうん心しまみさ
(義) まくり　秘
世上のまるさとあさうはとのち

きりハ一字とよむ
こゝろはひてしとりてあさぬよ
弁 薫此君こゝろのはしし優なる
ともあり
秘 薫の進退此君川り抄乃ハ望
まさしとあらす露もあ此中まし
ありとも
こゝろはひてしりしハ継と蔵
さしとさ〇さ8あ此はらし蔵

ぬよも
とはなしかりし
秘 露ハなとはなしく
きしぬるしきあかきれのとなさに
よるし露ハ抄此さはらの
義 きしぬるハ露此きしぬまも
秘 下句ハ中君の心嘆之
弁 涙ぬるるきぬハある〇君中心
まじとくらし露ハ中君の身ま

よゝへる詠かゝりつゆ物をも
あはき心涼し
なかりしも兼と
秘 此もあれさへなかりけれは哉之友
也旨此ノ句不叶也
昇 ノ歌不見
義 ノ歌兼可勘之
河 与恙緒新婿蔓綵附女蘿
古詩

松蘿契丈夫　奥入伊行定水原
以下同　今案是ハ女蘿也新婦之女の
やとりしりして此みの心紙に
へきりあへす胡蝶の中哥
あり兄て勘し付し
花 蓬原は松の嵐の音せさは
何とりもとみてやし
と業此歌の心とりは叶ひ
御しと胡なの歌何なり

かくれ菊と讀へ可詞なるへし
声まきハ秀也命下のむら〳〵紀行
ふかれ可とハへ可奇ことなりハ
おけへし未見及管見なれ
いふかし
私云花詩奇をのそれなり
秋ふ叶しむこ須し給本習
須し声也
中河ゝ明しき

義
大君をあふいつゝも
枯の色ハいとゝすさましなかく紀へ乃みゆ
侍りけるの
秘
葉もしくへ行まへ可事をそとも
あへ可能中勝明見姑天宮
心あり
義
葉ハ平生心あり慈ゝあらあれり
枝りり枯ハ切如へし
庭もゝれもまきとにいかく河達

まそし
(河た)さゝいあまそて人々ゆかりある前あれ
や庭もせうしもなく枯のおしぬ
私諸抄ニ載ス　義可考
故院のうせ給て後二三年ばかりに
世をうしときこえひし冷泉院六条
院みもはしのそく人々此心をさそん
ことなしかへ侍りけり
(河)六条院道世し　給ふ事

此詞よりみしより冷泉院は桂院
なり又栖霞寺也
私此詞乃はしき事也心得がたき
し是ハ故院とは源氏ヲ
源氏の御世乃末二三年御道
世まし冷泉院とりて桐源
氏失給て後より此冷泉院みま
六条院りもさしのそく人々
くみきみしと也

花
多々京云世をそむき移し侍りの
院は大かたふかく心むかふ
寓也とて　河海云　六条院道
世しのいけのほとり　此頭より
見しより嵯峨院を棲院に栖
るなりとて　今案故院は六条
院をゆかりの院に移して後二三
年をへて此末世をそむき移し
嵯峨院と六条院と紙侍

此ひと人の中に侍し光の末葉乃
冬多く此流より侍事ても渡を
得し侍しと薫大将より
其时の事をうしろ人の侍し
ともに故院に業上よりまかれ移りて
侍りの院より隠居し移しを
幻巻に此末より出家し給ふを
いひかけよりて多く京物語と
まは心え侍るよしとや侍里

河海抄に嵯峨の院をは尾すの
まつりよりて六条院隠遁の
事は胡蝶なりしかるにさらに古ゝ
さまてさ里次に嵯峨院を棲霞
栖霞なるをしるし乃をうれける
いあやまりや　嵯峨院とは
大覚寺なりつる也　大覚寺は嵯峨
天皇の離宮なりしを脱屣の
承和元年に嵯峨院となり

続世国史なりしのをとかり貞観十
八年に淳和太后正家に奏し
請て寺となされこの大覚寺となり
名つきたり嵯峨天皇昇遐の
後階庭不掃臺樹京壊とみる
事国史なりしのをうつり嵯峨天皇
のさうれ此院は世代のかはりし
ふる事をいまに六条院の帝ま
うきよりはなれ侍りけるしけふひ

あさき事なるへし
秘
此うち此家あまたにわかれて其の
事をのみ出さうとてかくなり
なへり弁
義
出されいさゝくをいへり
秘
清ゝ此流の花鳥にかくへくらう
大覚寺此事淳和太后は公家よ
奏して大覚寺と号しまへ
とて花鳥清和太后とあり

改て為淳和院也
義
花鳥の義用し
ゟ此内あらし此く〳〵いかゝ下仏あきた
く〳〵なし
花
是よりは家流と世移て六条流
手ありも猶く〳〵ての事と
秘
六条流之
とこらくありあれはちりは
義
六条流よつとひしく〳〵也

あるさまにて十五年弁

ちりぬる人の北堂せ給

ふかきあはれしとあまに心あさ紀

人なくといつる心なるへし

物おもしぬ人に

初いわ別 なき心も

まされ草かりて

秘

其備をしるしる紙ありくして

夕霧もうつりすゝめへと文箋

弁

おもひてはましてや六条院あ

なて後まゆりひすりし夕霧ふとも

なるみなひし事

河

毛詩云北堂萱 萱十 能忘憂

本云北堂儒者語所也

此ありし萱草よも忘草よといふ文

住吉北岸の忘草よ も此草なるを

今のり於体をも此草よりて異て

借之

まとれ草ハ悪草 又ハ一名也 又
萱草を忘憂草とつくる
てら草ともいへりいはれもある
なりと

あかん右ハ杉ともいも
義 夕霧明り
むかしにかへりしや〳〵よ
義 源乃御世をさかりと也
かくひなりかるしさ

箋 源氏くれ給し時此事
うれいあはれのあはれさは
抄 六条院此世をさかりのひしよ也
此は杉りハ葉至てつまき幼少なり
しと也 花弄 義
杉こ此ちか花暮しを
抄 大君のゆ之 弄 義
杉あしことは此つゐなかの明しひ
なきこと

抄 おもしろくなつかしいさま
とあり
箋 源の時の事も大君の事も
同前意をいふと也
すみつゝける程はまさりて侍りや
抄 大君は志しかし自らのこと
えなる事なれ我身うきのちの病
住まふとはいふ也
私此段の義も尤も薫のいふ

私批注ハ後段ノ注ナル
先大和本書之前

事く源氏の時は世のつねならし
こよなかりし大君よりは薫の思
慕ひ君の心よりまされはつらく
住みかはつらかへしと也
あはれとおもふなれと
薫のさ思也
昔の人といひしも
新 帰君也り
箋 大君の事をさほゆらしと云説

中君かうりなと此薫のさ由をきこえてハ
あはれぬへし偏して此顔せん
抱やかりしつかしく云を語物あれ
薫よりもとかされく一入悲しく
覚えて中君の心也

秘
此注下ニハ朱書ヽ
大君ハ恋しくおもし白きをとして
なりかりゆへ我身此まを思ひ
痛つこきあまと云へとも也
私此注ハ本ノ眼よあり儀千義

不審何此眼の注ハやと存すれ
ならハ未注し
あはれともかるかりまよ
薫の心よりも中君の秘を何道
たりとそ
世也
世にうきまてはあまたへたゆしを
也

弁
中君親山里ハ抱の寄　山里抱の
さひしき事と云て何まき世中ん

抄 うきよりはすみよかりけり
此うた山里ハ物のわひしき事
中為ハ山里ハみくわひしきあれへ
又は世のうきよりハ是ハ世務ハ
さまたけとなることなりけるを
みちいよは世中はすみかなしく
とこ世ハ世のうきにくらへて
山里ハうかりしも心やすき
ぬ也とそ

義 此哥以下同し
弁の尾しそしやかなしく
義 弁此尾の治り兵うろうろ
やましきと也
私 尾ありゆきとのすれハ
あらへかす
あ此きつりあまり乃引とハ
花 放文の汀忌日ゑとつやや
弁 八文の七月三年此四文治へ行て

松さかりやとも

秘 文字三年也四年とかんの哉也
不用し宇治へ行て松にるハや
とも義

弁 ん此詞為君三回忌年忌己来の
詞よりて三年ハかり松こし
ますと行り白のかよひさめ給て
ところとめす又例のかけんは忌日
の経仏ことに然ハ九月かくす

婦君此忌日ごと此詞にして付まて
の始ハ椎本角総の時かくすま
此ましとみしかり
かのとき寺此鐘のしたも
宇治の行闍梨のすゑ
思ひてまとさせ給てんやと

弁 中君の詞之 秘
ありけしと打かもとも

秘 薫の詞 宇治の宮此事

弁
薫の炷り
古今集にはきしはらのあさりに
義
八宮より
弁
年忌凡未定
私八宮の薨するは薫廿二才
の八月也是は廿四才の八月か
されは中有三年忌必定也
かしこ阿闍梨にきこえに
花
宇治の姫君達をたちまちすへき

事也
秘
彼宮をたるよなすへしとく 義
弁
宇治宮を寺になすへく寄進せむ
とにや
住みしなくさめり
見るにつけても執の心をさま
すみてあるよりしては功徳のため
功徳なるへしと
あるへきやうなり

義
おもしろきかきやうのはなかなかにゝと
經佛なとこそはよし
弄
中善ゆ
秘
中善者非悪非善の作善をいふ也
まつて
屋
そうさうりかゝやかすと
義
中善は心中にしらるへき事なれ
世の事にみしらり弄ともいや
まし見とのあへるやう此事

晩へし
あなゆゝしき事や
秘
薫の詞 弄
いつこにてもみそのにはかなしひ
待し給て
秘
宇治なりてもかく捨へてさは
對面なとし事也 弄
私何方にてもうしみそれたれ
なしとあるを中善なりく

和格よあひしゝひかるかう
きのしきうしや
いまよみやうふを
弁 よめるうりとも年へんとて
義 みなとのとにてもしくよ年しむとて
是れをしらなきおりまいきさいんと
義 白言は沛蔵なり葉乃年り
こゝろを不實し　猶いんと葉
のやんとや

ゆつかさめしの御さたかりし大京なりし
花 さつかさめしの公卿は政所の公卿也
大京のかみは大夫之
秘 さぬかさめしの公卿大京の大夫と
ありけ諸大夫也へし　義
弁 受上の別當之　白家まては右
京大夫なと家司　なりへし
禁中まての受上は公卿は花
大臣補すへきよしあり　ととり

おこなゐて同云句文なりてさふらふ
ひとあるいは疵所をさふらふや
さたまりしらせの文よ此事なきを
事をまうりて文を人をいはさ
かつひきつふて
（尋）
よくまそてさせ行ぬと
句文内よりかいねときこて候を
（秘）
いうりとのかふく言葉の用心なり
く用言如ーときて出るなり

さいはまうてさせるひらすんと
古今古事文の詞
然この事をひあまりさ毎
（秘）
中善此流かつていふ
（義）
言葉の心なり
ふかくすかなるをさむ
（義）
大善のたて中善をゆつりあふひし
よさとなりをしい言葉のをひくま
なき事ーうし殊とせる意なりや

是は悔しきぞや
なにとやら座りたる心なるらんと
（義）句は中無は仍りあけそうを達
やしなへ大無は名残りどりく
さ田おりしく志らいるふも暮秋
心ゆしとや
うれまとに海とさし志んまて
（河）精進
（弁）婦無ゆりもあれてより精進

うらかたく一向より精進とは何
へりもと
（秘）大無は緩葉は精進おらゆりく
まり海とや
たく家れいともまらく
（花）是は葉の母な家く
（義）うら家海もしき於いとあやうく
女三の海の葉は精進うら
に世もし心はとまりのさまはあや

うきにゆゑ
異 世三代家の業乃苗裔をはや
うしなひありしとみえたりてなし
（つかさ）頭也
いく世しもあらしとみえてよ
つらんはしか
旧本 いく世しもあらし我身をなそも
くあまのかるもにおもひみたる
世中をとふすてゝ姉かんをまうる家

かくらすていさ世しもをきこゆるへ井入たり
もゆめ紙
義 世三代た家まてやしけ深キ
業の世をまそてのふとも侍よ
ゑらくつきたりわたすなり
さあらけゑらし入そこ家は皆身よれ
飛ふかはつきのとさせとうし
業の世をまそて姉つ 世三家
の拖おもかさんの業の中七郎を坊

よそよりも花深かるへしと
のみまちて
かたしけなくいとおしくて
弁 薫の心中
おもへりくくは抱かるかたきぬと
秘 おもへるは女三宮のわかれん孝ん
あるなれたる心のさ女とも無るま
いみしきてまつしとし給
つゝと 義

弁 孝んなりし
たの大いとのゝおい
秘 夕霧之弁 義
よ給ひとことくのへてまちまちし
夕霧此句をむことより此さ女也
まみえり
八月十五日や
義 心のかなしかれた
句宮の女そこしかいらすの本云

いとゝもはんよいとめ事にあそ
あれとまへをそ
弁
内へ人紙つゝりしてさ　河案内
秘
夕霧白言のことつ是行はゞ
とはりしめ結まさ
おほすへもまへまそ
秘
中着て　義
おもひすきんもへのとへのまへきれそ
弁
日をとりゝ也

秘
七日吉日成へし
はこれ臣中納して
弁
夕霧の使也
夕霧の子蔵貴侍従は六君にて
一腹之
夕霧
おほそらの月たにやとる我宿に
まつよひすきてみえぬ君かな
元良親王集
大そらの月さへやとるいつ物を
雲乃よそにもみる君なれ

箋
月ト云ル於ハ帝ヲ
ワカタニ云ハ歟
宿ハヘキタし鈔
ヨトし

秘
元良親王の大宮の御もとしとへつかう（花鳥）
をまうしつかへりけり
拾
秘抄に同し 物語なとにまつはよ
此事あり
宮は中し
秘
内よりまするよ六条院へ行こおもふ
箋
つきの御文
中君よりしも宮よりおもせし
と見へしは文

御かた貴こしまつりけり
秘
中君へみをまいらせまつり 箋
御かりやいてありける
秘
中君乃御をりいてまつりけん
先二条院へまいりまつり
拾
白家門跡よりま中君のすへみ
おしよ中君の御をいとし
ありしや又二条院へ白家
ちりしおりと文

りんもに月かゝりて
匂宮中君と二条院より文
おかしとりてありそなして
中君の返事文
中ねのまいりまへ参るを
義 夕霧の使は中ねに之
秘 以中ねに大ぞらの月さへやどる
の霜の袖つらひなり
かれもいと打ちまたれと

夕霧の六条の事に之
いかいとゞくさりつりさん
秘 白の詞
むかし月かけんすひそでとう心ぞくずし
しいとらうしと
義 小町集ニ中ぬしる男の思
ひてくれしうてかに月夜ん
いとあはれなりとうすて詠ん
しそ口惜帝とてすのあり

おかゝれは男いぢなから抄紙と云
ときめあはせまみえくむとり縁なん
まひりし時ハおもひ井川月を
あはれといふこゝろを川なる
私莫對月明　莫思往事損
君顔色減君年　白楽天か贈
内詩之法抄月見ることいふを付る
ふひかり句論の事なるへし
白楽天月をみるはいむとある

りいはく叶つり
くれのくさより志んてんへ
二条院　覆房よ白楽をよみなし
仲君ハ西筆なりけすみまつよし
見えけり
そこ海くれうきこめへききちら
申しハ
源川をまれしもや若妙の
桃のしゆきてしと海つけゝん

いまたなりしものをしらし
義 うき世は人の心とは白文也只
とりすてかりかりし貴との契り
さしつとめくあかし枕とかは
又我れしを中也君也子なりは
何とも心にしらしめともいへとも
枕のうちもうちたかりし我を
心より深くもつら先は我なりし
ものほしきとしるしるとも文

世中をおもひしめくるうき身なりしも
おはせさるましくとしろを
秘 八文也事く 義
异 八宮の御中きみの心
ちらつ貴何さ身しき事しと
云然
義 八宮大君也失ましつ
人々すくりもなりやう所
所 人ヒト流カズ 拾仙窟

私流字ハクグヒト云心ナルべし
みをおしむ心ふかくして　なし
なりけり
義
句文は此はかなき世を中着は罪ふ
かりそれなりとてもなりけるの
かいなしさもうすきぞかし
やうなるべしとや
古此歌しの身此うきさいきむ
ことなく

私古文大意のうせまりしは
いかなしき此ころはあはし
とぞらりけるは一脈身より
みて中着のいふ文
記ことむう世よなしなりなきしあ
しるはさりとも心もはてぬ
弁
中着此んと又文文あ孫文なるの
事は悲し　あると世人ぐさ
すし海へかしと句文は殺りま

ありともさすかふみも結ふ人と
えへときしあふりて出らこのゝ
すゑとつゝまを
義ハなき人のやうりみあまみま
しうへそるしといのなく
さもきとも心ものこすそるへ
清しさいなくへ物なしとも
義
義ハなの詞よりいうこさ物いへの
心なるもくりと我なりしいふる

秘
家とくへ家婚来也
山ましにゑしたてまつへきとそ
かなきれとも出今なつしさいなの
こともなしとも
それつらなりしへかなとうくさめん
こと候ありけり
私中君の義くにあつかなれと
心を我となくさめん事を
ありへともなくさめんとしと也

さら母をとしまて山に在月をみの
ありける
我心なくさめかねつさらしなや
をはすて山に照月をみて
花後拾遺
月みてハ誰も心なくさまぬ
をはすて山のふもとならねと　和泉式部
こと葉姨捨山の因縁大和物語
まくりしく志賀さま侍り
都にしてハをはすて山の月すみ

のありしと云事打かけりけるし
是ハ上代詞なりなくさめんとて
ま付て姨捨山とハいひけるとかハ
多ハ歌ハあまたともあるは
をはすて山の月なりけるあね
よしも又中君の句ありけり
さて猶さら人作りの此山に拾セ
らへらるゝ
秋
なくさめんといへる心よりなましても

いつくりみんかもとはさて山の
月之義
なくさめんとのみかはいつくまさも
とんさて山の月成へし
山下風ありけるくしゆゑえ
義 宇治と云名は憂き所とよくての
事く
さらにいさも打わしさて
心中此愁ゆへて

椎乃葉のさとかはおとりて おも
おゆ
以 露まてい宿あらはの紙草枕
猿あし あまたは椎の葉よりの
川哥あり及いて
花 椎かりとは此屋をりさえゆ花と
拜 椎かりとよめる事もあり
宇治よ椎此木をとかるなし
秘 枝椎かりのしてはおとりける

（義）椎の葉の音ハ松よりもあらく
吹物也二条院此宗なる松風さへ
宇治山の風あらき椎の葉の音ハ
音よりも松よりて物すさましき也
（中院）山さとの松のかけにもかくはかり
身にしむ秋の風はなかりき
（秘）白家のうらすそまへ〳〵代にて
葉しらとゝまりけるをやかむ
（秘）蓮の山風のあらましきまゝ

すれかけりやしと斎をとうしからえ
（義）やかしたむ一大事なりこと
あきとてもかくれなくなり
月みれはいつも侘しき物哉
後撰（才指夫々）云月代さひしくてあはれと
つかいさむすりとも人の気色に
よみ人しらす
独寂のまなしき時はなを並て
月代あはれとみるゝ儘の

弁 むかしより月をめでじといふ事
出所不明也但後撰にあまた
秘 小町か集中にをかしき男共
てら詣らて月のあかりけるに此と
あはれなるをみもそゝ詠んてそ
そらおほしく是とてすさひたり
なかの老者これハ男のつらに秘抛とさら
きこえ侍りけり
ホ二八朱書之
私云此月の義ハ前よ門

見より詠たりし其時ハ敦実
業平月硯あはれといみそきつ
此哥此人をえいふや眺月者
おりしる世をとこえて常に
つもる抛ちかたさまをあるは人
月此かたらいこそつもりせいし
くれとも云ひてす老となるまて
月をもそいひみし大方
詠みとあり

白楽天贈内詩莫對月明思往
事損君顔色減君年
月は陰氣の故に愁を生するなり

箋

月を見る事は古に扨しそうの道
の同也と又楽天か贈内此詩を
引是は楽天か江州の司馬に
左遷の時内に送る詩也内トは我
女妻を云又古ても哉へとするか
といへるは弁尼とはおもはすや

治より定か年し老ごろく
たうあきこゆくさ抱

秘

懐姙ゆへなり
ゆしーしめりいそしみて

秘

太君もうく不合しきいさ
つましと也　弁
これ此事よきかとも加して

秘

白言此事也　箋
さつへとも此心さしかく

弁 中君はあまりなれしれ人さまでと
つれなく気色
いふかひもしくならていたしさしおかん
義 中君の詞
私中君は心なりしいつしかしと覚
すらん
あなたりし哉
義 しらぬを見て自他は人乃まかす
てらんと也

くまはなきせし聞えひとりうしみ
きこえんと
抄 草子地なり
義 中君は心得ぬ思しめしてなり
扨此かをのくつは
中君をも薫つとも大君の方おもし
事をも志らぬ也
言いつと心くるしくおもはるゝ
いまめかしき見ぬ人は

義 白此中君の事をいとほしく
覚えさせとてもとめてし見
ゆくへもそらにと心けさうし
給ふ
まちつけ見ることしまへる所也
抄 六君此心を母也
へのりて
義 六君のさ母なりし
いかなる物くし

弄 白玉のごとく推しはへり
とや 義
おさやきて心もへもまさとやうなる
うくなし物おちりける
義 是は六君が此まほりし人をみん
うもやすおきりうやしらいふ
とやおもんさわりいうしてみへ
しとおふせしや
林乃義なるをうけあふりはなや

花 おもしろきものうちそゝぬ菊よりまさ
義 あはれなる此折の秋ならは
かしこくとりは心乃とまるらむを
まへし
うちまひてもたゝへはふかきを
義 中君は居給はねと
細 御かたり給ふへしき
六君への後朝は見る
れまへのくつきしろふ

義 御おはくて我とらむかつくさ毎也
天下（アメカシタ）ありあまり揺き
秘 白文の御心は中君なりあまのく
とゝもとや 弁
私 白云此浄心世間なり平出
して君子なるにこゝろうる
六義をのあしうすいへ霧
なきれりて中やしのよはひ
られて中君の御わかしたれ

よろしと此引し對せんはかうへ
なを清かりける色の白妙
の色にも心をうつしけるとぞ
はかりも詞にかはらく
義
六義の法をもとゝ心得りて
結句とおもひあはせと表せんことを
いおもひつゝけてつゝみせん所を
よりもくるしくらくいふ事
中義比ことにいたす事とも白妙

の心なりと
いひきまてる歌
秘
中きよみの清まへまうかるかう
絶くされの清うら
秘
中義之
義
白妙なり
私白妙なり
秘に中義といへる事あやまれ
り

ふしろもうてあまたは
義 中君ハ外なからいひうまてを
さしおほえありまへし
うらあるみなるへきか也
義 猶義なきことへきなれ神妙へし
あいなく深くまれて
義 句の中君此心得究してく
おもうくしりやなとかゝめとかや
中しけなり

花 おぬかしうる也へ此知うへの
ととりうくしうる也
私 花鳥の義如何
私すへしきつくしさ代申きく
いさんのこめいりのゝへて集如
へし 弄 義
なとくみとなや申しけなる
情ましきなうん
秘 白文の翻也

すゝしかるへきものにても
義 八月十七日也
さゝしよせさせ給ふ事も
義 引勝をも給へし
なかし傍都をち
弁 うけ此人をもいふ之難をもかゝ
し 義
く翁かことにもことによれか
秘 く寅めかしのかた紙をもらへるよ

拘りれとも
弁 ことよりは実なる事のうへを
よくのするをつれなしとも
てへきおしさしんをいてたれ
秘 中君のんあり
義 うやう此事をいへ竹のは腰
立此様乃みゆるあれは中君の
拘めるこゝ
黄もへふくめありさまなりし

義 人のこゝろをたゞしうして六義
の事をつゝむ中義の類也
いとよく此さまやうあるにと
秘 白此類也さまやうありといふ
まへまとも下は心此ある也さま
くらやなかりも庭うへ来きこ
されは初蒼まてゆるしと
あらはくさまやうなるはまれ
宣り

弁 白家此類也さいやうあり中義の
云うしまへと下此なれとよう
ことめなんとこいつまて離ちりやそ
をこしら猫をなしこく類まもれ
あしとのあしいきうし白
家のあへしらひのようり
祝又とゆりきこの
秘 六義之 義
法心さしをうかりしもわかぬかなり

六君へもけんさうしかりしも
はまことみなふれしと也
義 匂兵部の心も備りていかうし
中君にむかふ時は深切に契りまし
まふ也
いかさまにもはしきけんは
はた ありてぞ命もかはり難かり
うれしきけしきおもほすまじき
拝 あきそれぬうしれんや 義

抄 後世まして契りのふかしかるも
きや此世の契りてさへよやらしな
親は後世をかしてきれむへ常き
と也河寄同多 義
後のちきりやしらぬ事もあらん
とおもふまち抱ちりすまそみも
常此まじめんふれいとそ
義 此世のちきりは浅きけんみしぬ
へかまには後の契つまりし常とらは

ぬまりやとふみかくしありすまゐよ
みまさのまめへしとも
（河）ありすまよ又もすれ名れ言ありも
くふくしぬ世ふしままくとし
称人すへ給てと
（義）中慕此大なきあしと懐思し
給へかれと渡のきみ迄花めと
哥とも
川ふいなき月給ぬ

（義）中慕の日しろ思ひあひしま
あかりかんしさり行りしあき詞也
日しろもいうそうさなまりわしかんし
してまつしと
（秘）中慕此人也　義
さみあれむ家こし　おかう追れ
（義）身の数なしてへりときれなう
車古宮帰慕ののなしまて
へやりの時さかいつる又宇治へ

物哀なるしもまんともなし
いともうしくなりしと
中若の我なりしもうりしく
思ふところまことそなていとみけりと
えぬとめりぬなすとおりしろく
なきり
志めそこむけ給ひし
義
白の中若北方そしきさうと
なめりにしまふ也

きこゆるもしあはれなるはんと
秘
白氏詞
擬鳥そこう清心しけるとき帯まとふさ
らすい秋のなごに松陰しうつり
まろうき
無別いふまし最清んそとこつ
まい庭の名なつそてすふなる
しそ志しきりつかよきなり
りしさやりふくなくらし秋の

それに人もうつのはんなへしと
かりて白地にしみなくある歟也
表乃すれんかりしそのなかにり川
きて
秘 中なれ地なる也
義 白地表のあて乃心かりのなかに
は事て六分へはんのかりさる六
推量するなとは洞なりつらいてよせ
心乃ちかりされる也

事にありなん也
秘 白地洞　義 中分をはしりす
の語也
松されの浜松のしやする
んかさなしらぬもなく枕紙の
のふしと中分を白のなる也
まことに心よくまれ有きれい
實心乃そこよくれさう事のか
きとも中分い疎略なしとも

いみしくおもしろきをしてあるにゆるも
ゆとおかしくへあつさせし
義
云君へ心ハおこなへつくりにいふ
えりとしてはしるゆくに於抵
のへふともよつまくしよおこえの
庭の心わかちへしすかへるへ
ささもあれはしとも
世のことはりとおもひのなくへうらかり
しきおほしよりかたきまつ

道理とも少しまうすのうへ中
君へ句のくのふや
まうれ男ようしても
抄
中君乃男とにちうしてもかし
まへりのくへとも母中宮はまう
なしゃす御んなへたまをいとも心もとも
をはれとも
男を心ともちぬかりきぬ　弁　奇けんおり
河
いはせともついたれまつひるき於い

身をなにともおもはぬ世成けり

義 白のはなかりまう給ぬとも身

哥なり

花 思ふやしなり世をかへして

白衣は位なきとなりつこき給への も

あらは中若紙后なりこれ古事也

[illegible]

秘 甚之なまもとらら給ひてこと也 義

定をやまくつとい川へ事けると

あり給い

義 甚まなり立し由けん事此あり

ましかと聊尓なりとよむと

一説なりいあらもてよむ也

命乃こちな様也

秘 えならしぬと心にも命あらは

あやまれるへやとぬと

拾 恐ちかしぬ今心によめるこれ

心あり

箋 とく前なりしらていとや川
うきし
かしこにすそすむつましきへ家に使
秘 六君此処のあり
ちかう人こそ事もを住まく
箋 此彼中君の此方へい用とこそへ
きこゆ
此南（ミナミ）おりそよ
義 中君此おもしすろうし此南おりそく

何まれ此うの御んつしきましとよ
玉後 なりまきんまつさ此ころのめをふの花も
古武川玉をとうつものでて黒主
之葉後期の父此使ふ縁の叢
きぬをうけうるや
秘 玉藻のよの縁をいふり
義 うつけ板く
拜 玉もの事　後撰よ大伴黒主
うしきたえてかしへめん　時めん

哥なと例あり

いはのかとりいうきうたすのへつらん

抄 白氏いはく乃能よみをさきて集し

を稀つらんと也

箋 と胡ともに若れうしへあはせし

かいつれ雅りと也

やすらはいそけんかし

私 草子の地なり

ゆしくといはいと打しきは

抄 さしよりくらうつる心也 箋

弄 うらはる御心

すきしれよりいまあれかしと

御使のかへりまいらさるかと也 白

のんなりき

女房して御みとりいれさせ奉る

こゝろうくて御み給ひ白地にて

見給ふへく

つれなきけしきにもてなしたてまつりて

弄
まゝ母は文彦
葉のまゝし
典侍腹の六君
をやしなひ
給ひしは也

私中宮へのゝしり白けんも
継母のいや此侍てなかりしと
秘 藤葉云々 此六君を雛子にし
給ふ云々 義
花 六君は（藤内侍そらし） 雲井の雁も内腹ならね
まゝ母は藤葉云々かゝね
私花宴の義あやまれり秘の
義よし
せんしうかまてもうしろめたさせん

まさや
義 月年ありてもみの也まゝと
中君のみならは六君乃為なりけれ
遠慮なかりしゆへ批れそう給め
くしと云つゝ草子地なり評て
けり
はしらかゝこうしいつさゝに
花 これはみ乃詞也
義 文の詞なり宣長うきといふ也

私はゆめしらぬ進心はんなり
さしおかずしくすゝみぬは
心なり
なやみしけふく
六根のさ波とぞなる
此歌は六根の六塵にまよふ事をよめり
とみえしぞ進むはわが身のさま所の
いりしも六根清浄なれ
抄
いりしも六根清浄ともなれば
菜の花のゆかん六根とみきへ家

義
心なる　釋
志ぬれば六根はさ毎よ心いふなり
所々のつゞくをまけのれなり
やむ起ありとにるんをかり
私曰宮此時に書乃ちねく
かんむとも當部花なし讃まへ
家なりや
何
めつとも浦しけなりも
めさ川なる

花 いろみえずとはけのかはるなきをいはんとて
云の詞なりとぞ
義 如ことう思しけれはなかなかむつかし
昔より白言のいひなしなりき
秒 白此詞なり此ことはいろこそうけれ
なりうることゝぞ
心やすくて忘しはあらんとぞ
世とぞ
秒 又物のみ人なくしてあるまし

抄とよしや 弁
さし人の中にそうゆる数事の
義 もし人へしりうや此事しのあう
ひかる代女のとめりくるし
ともへ此忘す一念れやもせん
家ちらすとつゝゆんのうそ
中君のとめ心くるしかるへき
事とも人此忘つめとおへきぬ
と思ふとぞ

みな人ならしくか
弁　世にならしくおりよす
すらことによ人おりひしられか
義　白ハ坊か◯そこそや
人もはれきいとおしきも
秘　中君の事よりとい云哥しを
いとはさる文　義
義　こゝろさえぬ姫へしとい草子之
りたりをめしゝかしけき

すゑまひて
弁　六の君の事
私中君の事也以上弁
秘　中君なり　義
私中君の今の播称を借る
のさいたけ人そといふ文
弁　匂宮の中君の所へよるかるぬ
事を聞の人よりかゝりといへり
ミ　つれんりを

私中君の返文　尋　義

あまりにおかしくて
私は雅白は何より中君へ
よくれもたまはりし事と

尋
白雲のまかりしや

うら紫みちをいつはれかおきらかす
中君は心より恋慕嫉妬のす
黄より おかしいひのまへらう

をいそではじめの事そとも日
清らか身上なりて日知家
とや

文は津縁よりもこらとはさら

義
白は中君へつ[illegible]よりも深切
成なり

又人へ対してことはりてせさ
故に川く
中君へ気の人へこさ物文花鳥まれ

沸あはせてうきを詠ハなしし侍く
トアテ侍こあちせハ食抄紙云
從し胡の飯を胡あはせと
いへり合子にりうゆへりはかせ
とつふりやとアリ
くゑめまこいク侍るさ志ん房たり
ちくり頌あ
義 六君人へおいさんとてあり二日
め此篇のりく

抱打ともりきんへの
秘 中君く 義
同くらし此ちくし忌ふ
河 同くらし此鳴つるへよりなるあと
志うハ山のかけふそるを恭ゐ
秘 引舟同此んて 義 舟 舟此ん
義 字治へゆりゐやと岩ゆす打かりや
中君 大うさに我身をし抄紙同くらし此
あらしめし古秋のくれハ

（秘）首の山寺はましかしましくは
大かさふのとゆへ身抱くとと也義
（弁）山寺ふくきのは大かさふまし
抱くとと也
こよひのゆきこふをぬくり
白氏六君へたやくおかしこ也
あまも流りすかりりま
（河）忘てして孫をのこ時は春あ氏
枕乃下に海士さり拐する

（弁）親の心 河海 秘不川とく
（義）川寄日中君の心
（義）ふくき心の肌と
中君此心より白氏また執着心
本の身よと我をかしふくて覚えて
とえ
（秘）ちしめよりを抱わとり勝
白氏ゆくよさ向くのとみ紙
すみとく

弁
白宮の中にまかり物思ひせし
事
義
白玄の中絶の事
忠
志のなやみし事
義
懐姫の事
いのちみじかきそうふして
秘
母も姉君も早世のよし
弁
三孫之事 義
又いとつよくも何なる物をすゝめ

秘
懐姫として失なはれ給ふとなし
しとや 弁 義
我
此日は其さいのる事
秘
明石の中宮より六君にあひ給ひし
し三首めの事之弁
折しも北の方にしてあひたり
秘
夕霧之弁 義
中納言君さらにいまにこして
義
夕霧の薫をとらへて同車

しして出かゝふく
あらひのこと三月
花白文游要の後三日此表の
事也
秘 三ケ表此仮之 拝 義
此君も心をいけりしと覚えれと
秘 葉もまむこたりしとふりしりさも
私之 如 あいす徴さら候をつりしとおり
葉く此云君いかたり葉ふとの

結しくしらかれ人かよしもし白
よ定中りうくつりとかにも打く
ふまんのふくへ手り也去てわれを
拙徳乃作ある此心候屈りてか
くたをり
まり方さ母り
夕霧此事さ母く
人此らへりみをして
義 葉の云君候白文乃とうしく

も移ろひたるとこそすゝしき
おいしてあるハ職式なとそなり
ゆらめくやうや
たとへハ見えてあるの〇てらしと
秘
義
夕霧ハかゝりてくものへゝま
薫ハ心よりきかぬをと夕霧ハ移さ
しと思ひてゝ
よひがなることるかれとなりおかり
ましらまし

義
夕霧の亭へ句ハおほかたく
李由ハ花の例なりとあへるを
花鳥なりのおもしろきを後よ
恒をと
もちかへりてせまへり
秘
三日の氷ハもちかのすかま
あり
弁
三日ハ氷の餅と銀黒り
りのを

ゆつりしらぬ事
秘 草子紙く
義 つゐたりある事らし文
とみなりを出格す
秘 白文は六義也専なりけれ
して外様ても海宴を
画さらそへはそこく出らるや
卑 義
義 あさ緑ておいちと秘ておゐて

ゆきとん死らく
小のぬ也清ちらりし也本意へ翻
藤宰相
秘 雲井齋の兄貴也 卑 義
こうして出る人家清さ両
卑 白文の庄へ出るへく
あるし也取中ねさらり寺清く
あらく
卑 盃をとりて出さるへし

義 匂宮へまつよしいゑとあるし使
の人は六乃君と一腹之妻ア里君
た少将伴年勤く
中納言此つくす紀人なへあるよ
薫の匂へつよく酒を花弁なるさ
よりいらきつりなと
秘 おりしとりきあしきていはとおう
まし事を薫との猶し事
弁 此心しもうの人ならるみと

義 おもしてわしたるもなり
されとみしらぬやうりていとさ
なや
弁 薫此乃しらぬ親王なるさ
秘 薫乃さ波之義
あ此さいはいそなひて沸とかせん
くしもてたやしのき
秘 薫の出まうき 弁
義 供奉の人ときつきて饗應也

おほしあり房と人々よもいはて出かけ侍
よりくて借ちと文此借ちの
人大人之
義
李部王記ニハ十人と見
四位六人ハ世比清くそくなりぬらうお
うるくて
異
三もあいよそつるの世比清くそく
大細長ハちとゐる人々の装束之
五卅十人ハみへさるのりしまぬ

裳のうちしもみなきらめきたまへし
秘
かんへうさるゝは裳のきぬよ中倍
あるや
義
女わひをいつくすなり
義
かきぬハ裳うそふへく
秘
裳の腰もきぬよりて腰も
きこしあり文 義
弄
同云くてよありとみなり
裳のこしいりらかいひや成

一或ふら一巻唐ニきぬ出ん名を色

色くよありし織物ハさまく出る

草絹の次く也けり　きぬ染

あるとそあり

六位の人ハあやの袍なりなるを

なと

義　より袍ハ位たかしあやハ浅

ものゝ色志ざなるなし

秘　律令（りつりやう）のかへりハさしくへき事まる

くまきたる志さゐを執し給ふ

めし次きと給へりなと此

秘　院の召継より親王家へまいらし

しくてめしつかひなるへし

花　と給りハ御厩の舎人也

西宮抄　院宮雑事中　御随

身勤兼行召継　奏時云々

今案　親王家又有召継　式部

卿重明親王嫁娶之時召継

以下錢二万を録ことゝまりけるよし
如の說ありみしより自之ゟ世の
もちれよなさるへし又知足
院禅閤の猶子として花
継を具せし事もありし也
筆
已孫なといふ近衛殿の舎人也
右家に預られしを云也 慈親
まこれしをめしつかふ 摂家以下
是をつかひすとそ

私秘の義あやまりや花る
ふくりしくおゝされたるをえ
此義秘すへし
されとくわしくもとえそりうへ
してさり申る
抑後の作者の筆法也此度
乃事いとしくしく見とて心ま
しかりあり
私云ふうくと云ともまた草子也

花

李部王記天暦二年十一月廿二日丁卯参議右兼相坊門家娶公中女廿四日夜更衛渫向右相府亭〻東南對廂東頭西向設座以朱臺六臺及銀器弁饌女臺一双様器弁饌菓子木安座右其西北對設客座主公傳侍女告脩饌由即出就座兵衛督

師尹歸右衛門督師氏朝臣相次加座以折敷饌左少將藤原朝臣伊尹以盞酒安臺酒巡兩三行即入簾中侍女以一盞餅安莒蓋〻〻公主傳客歸起就別處命飲渫賜陪從者祿五位三人白單細長各二領袴一具六位有官散位四人各同細長二領

無官三人白絹各一疋已後以
下臈二方ハ采女并ハ尋
常の裳唐衣なと細長ハ貴
女若ハ若しハ抱之故ニ別ハ是
とそゆるし之ニ定さるにて唐衣
ハ中信あるへしといふやらむ勝よ
小腰之或白或地摺或村濃
未有差異之

中納言殿乃ほゞせんのあるに

抄 批評の微謙なりけり
くりてらだ年きて
拾 葉のくりのよりけり同く卿しも
箋 葉の事ありての事也
表乃布もて引てミ見けり
箋 是よりこれこゝろの事の頂乃
やりけりなり
君ハ入て好しなして
抄 葉之三条之なりくりなへり 箋

弁
薫の三条の宮へ帰りての事より
三条の宮より二条へ帰るまでは
いかにみしすと也
花
薫のうつり給て之来の儀式を
心より思ふのまゝなく
はしたなけなり
義
何とも打ともせゆき極秘なと也
さる代白文の詩まようくあく
おしまへ給と思ふ也

まれまてあるましい
弁
夕霧のことりて解とりやん
庭の秘
帝にまれてもよしと打なる女子
秘
薫も女子紙ならしては白よ
しそとそまつしめと也
義
内あさにえさりつゝせさゝまし
弁
白文あとしを里のめ内裏なれと
あも条しせへともおのしと也

宮たりしそまつらんと心にかけしまへ家
むとめい源中納言みえりと
弁
白文みと侍しまへかといひよれ
薫ふおゐりあといふ人もあり
秘
白文字と我例との記しまをと
いふを
ゆかめきこう物をすと心にこう
きこれ
秘
ゆかめきこい思ひしうゆ
弁

義
薫の心なり
こら此佛寺しまあ事
秘
廿二文此佛事之義
二君ありいとよくにまつらん時なり
秘
宇治大君之
義
故君又こさ文字清也
あさら此君をそへ申たれ
弁
薫のおりひへ
秘
廿二文ありさつ姫へし
義

さきらにこそ侍るめり

梅家君の心を寄して侍り

梅家本
うちまうしよにゆかりしあたせきた川

とみなれそめたるむかしそ忍ふれ

河
閑川　右　坂冥川　　實年菊

合よあり

秘
あせらせ大君の許ゟ人めせくら

やましるし秋のうくいつき

まきつらをゆかりしかたとはよ

ありかくちくらり詠へ貢事

まそいふしと云我所教なるぬ

あれ物へしと云ふらいつしも

大かたまさらんやせきた川たえ

坂の冥比小川をとくいりみ

たかとそめたるむかしをみかたさる

よ別よまかせたり　判　義
弁みなくし水別はまかせけるこゝ良のほとは許あり

忍書
ゆかしらとをへは尺ゆきと冥川の

下のよいつさゆかりのは

三九

あさくしそくいふ事とも也花川の

こゝゆり心はおもしろくりおなり

秘 義

薫の奇也

浅くみゆりともさく〈〈見え

下此流いるゆゆのあるとも

かしとのあらんくさに

秘

奇をとゝつりて草子也よく

なるま

まのもいに此そしきをのう

秘 義

薫の詞

秋山をき秋の色の称と

こおりしきこと此教を待くさ移也

秘

薫乃事をいへり

私人は情しらぬ人なる

事をさのむしつきもと

しりのとも秋のさま

のすきこゝろんくやすなり

なしさ也りおいらひある

と情なくいかにしぬとや
あかつきは世をそむきてまへかたの
わかこふ
弁
廿三才此わかさかり尓よりし
て年ちくも於也
抄
葉ゆへにあかつきに廿三才の
わかさかり志とてすくへきを
義
云り 義
白才夫てありけんあり
才も廿三才此頃かなきこしかゝり
抄
白才はしめて二六才をかん縁ふ
へ 義
私畫かんまふい四日めみ此事
とみゆ
たわきこさよれかくなか
見より六才比さ母をすくれから
とみゆ廿一二とかんしぬり
かくありけりあかめあまく

義 かくこそあるは不足成りかなれとぞ
声にあやしくて心ともとりし
義 久寿比り慢ならとぞ
人のあやし心はやみありあり躰
たし
あいきやうつきらしき事う
義 見しより中悪のもの云
恋いのはれくさい
秘 中悪なるを
物のまふいふへきと
弄 六悪の事　義
かくしくしけなり
弄 六悪の一つとあるを見あしく　かと
くしし哉にあわす
きいのうつつしれるのいめおもてく
義 結構にし暴薬と侍し事い
白文此段月なれうことぞ
心えぬまで志乃こ挖しまへる

花
さうしハ穀也出乃ミに事ゝといふ也
簡略するゝ也
弄
好穀
抄
さうしハ穀也出せんゆへ色し
うるやかなる心花鳥諷詠と
云れいらく　義
私あまりめつらしくとこせん
ミて心しめ事ともしあるか
と成をこ代ミそうしと云也

三てうし代大かいあ志
抄
雲井代唐乃事　弄
私春言の帯乃ゝの也
文代佛相わし
白文をまそうしまつ一執と也
二条院まえ心やすく
義
白代久雲代上条院まのみ加て
してゆ一弟へをとしなと也
聞代まらま拿しるをるし　やまり

む
六条院の南ハまちよりて白河の
わたりすみたまひし所也六君も
義
六条院をもすみたまふ也弁
是ハ紫上ハ住たまひしてさし白
河わたりに住たまひしなるを
うらんとする也とハ
秒
中君ハ心も不宜故也
義
中君ハ心なり
いとしやハ名残なりけるにお

白河ハあまりなりけれ故なりさ
ることや
義
うれしとも覚えす
義
何とやらて宇治を出しうる也
契りそ志のひてまうさなん
義
中君宇治へ乃る也
みつからまうそかしなとおほしそ
義
二条へかへりけれハ宇治へきかし
さしと也

一日(ヒト)比とは雨さりし比つくへ出まうし
秘 文の師八宗の師三蔵乃行事
も業のいみしき御とくりす
や 弄 義
私清書此あさき何闍梨也中
弟子は中けるも也
如来御はんへ此たまひけんもしは
秘 業の前唯弟子を三乙礼行給ふ名
弟子我か身も心のまゝ中ゆ弟子め

清水に御前のあやて
義 是は業の八宗ゆうを尊く
三礼行乃未三年此行事そ
ありとこそ人もみまへさう
をゝりと花鳥の流いて
さりめへくいふつらりと
秘 清いそもあしい立よりあへとこつ
うちやしきとゝ也
弄 清りめへくい業はとも語ひも

せよかしと也此義ハ務ハ一流云中
是のしらへまことにまさる人とて又必
こく薫のところ明して見わけ
なきうちもあへしと我身の事ハ
すゝへく云々
私秘又算の婚此義よし
文此はきを見よまたいのことも
八文の伝の此事をとよ須は
すゝへ家ゆへなりかくこまかにしと給
へしとなりぬ子地頭へし
志まとよろしくてまつの浦とうりさるに
義
岩まかれ名筆さへ清しかり
けなかりあけてよりさまくみ
はりて志うもみつしなとし
あかよ薫乃心とあめ九り
めへしと也
言此いまめしくこ乃みそら路
へ家

秘
薫此心より句は六義よりつき
まへちなりし
杉初しをとこうけり候
義
白の中君へ跡をかける候なり
憐急の事へ
らけし女りあく
秘
薫の五事　其へへ乃五事
まいらく之
一日は引しましら寺よりさまありして

弁
五事此朝薫の事
秘
宇の流忌日乃のなきとて大概なり
ともや
花
故君やの佛忌日なり経仏の事
なほも気もら経てきふし経し
りをとりしてらくとさなき
此れも中君の佛為なりとら
是紀しあふをさあしへ忠
名残とのきかへは此のへ此

はるめ心はしおさく妙にいてつく
是ハ菫花みの色ゟ翅
志のひ傍しもさ里つのゝへみやう
御り法おひえりして
私はれりを沙法すつより
申さい中来らんれ付のゝへ
きよしのまゝへきとてし
のひくつとやまへり宗佐へ
またつとすゝへきれしかりあと

乃まり　帰かた義
弁
おとはしよ志のひよいてはしよ
しるとをこるいしとやさ里つのふ
ゟ庵りとしし葉りへまうる結
りんとのゝふゟかもいふて妙と
ゟ心たりや
なこうりとの縁とせつしこそ
弁
りとれ名妙と乃まへさおさ
く妙ぬとや

抄
古は友よ凄んはなかりけるまし
かはとあり
義
中君の詞とはけくいへり中
君へ隠ろ女云と思ふをむし
のかたみとは曲なりしとや
私おもへり花鳥に書かされたる
義絡へし皆真心也
よろ川いきるひく
義
糸りてやさんしとや

すくよかに
薫の実なる情く
さて又乃日夕つさそ
義
又のあしたし翌日の夕く
いかしまかしきへまへあい
義
薫の焼きへさるはあまりたと
ろしきとや
丁子抱しれ扇の
義
扇は丁子れ声の紙わる成へし

秘よ此つゝのかゝりに扇成へし　弁
廿悪もあやしうましよ此事
秘宇治みその事
義うひかう志ふりし事又
けてあさましとゝうらみか
秘草子紙之
義いかりまくらして此事之
らしめ玉へ此はかりさぬ
秘白まくら成きいふ又

何事もいとゝあらなしとみかしきと
なまふかりしや
ちかくしとてみされつる前あり
ましきと覚ませ成へし
以ふたみとの内は
弁ひさしにすへきりけり成へし
私これおよ兼りまへ斗みと
のお成まへありし哉又
まゆとめしと被りさうましうれ

叢の詞也されめへくいふつゝしを
とみの詞よみてつかうのこまさとの
めしまいあつ侍かといへり
是いふしてゆかさ弥人まへ家
侍りめへくいかんつゝしりとなし
事ーといへり
宮まるゝせのうとうけ給しれ
時かい白家まるゝ機まへりと
きこしとや　并　義

さしうれ志つしもやうしくあしく望
術かありや
きよふいみとの内まてあいめ人も
ありみ時かの文よみかけしをみ
とまうし事也
我いとをつゝしく
中君の心也　義
くれとく志てゝきかれうらへ乃
みをいひ出へきみ也

一日まうしし侍し

秘 義
中君の詞

宇治にて父八宮忌日中納言仏事
乃さたを中君染のこなたへかへら
をゆて悦ひあへるも心有りこそてい
こまりしさとも忘れかねとてみま
てやしらとも文　花鳥説いかく

但須く

花
光いとゝの宇治の山にもとあふ

しきしきに思ひしゆつりあへりし
あとの跡し事とゝあう
いろく忘れこそ

退しりつり　しりき文

秘
籠中の奥よりなとゝ文　義

いとをしくも侍かれ

義
薫の詞なをしくく惜こしらめる

とも文

秘
薫乃詞あはれなりけりしな侍

なりかとや
まめやかにきこえしさま給ひけり給しか
さりけしき
義 こゝにはかしやうはやし一貫のまゝ
ありとや
常にとおりしく
中君北んや
ことはつゝまと
薫のいや

言乃は人々へあかしもすに
抄 白此二君は男かうつりもの筆
うりかひとめとうとめ
義 白此中一をちてひさけあとの
心や中君に薫の心かくほあれなりと
さて世やうきこゑて居しま
河 世やいう貴人やいつきあたりの
うりもよもむしはすれかう
すうた

秘
秋しらすとや引哥世やいう哉
人やいし
哥 引哥同義
山はしにあるさ申よ
秘 薫へいまへ前也
我れいしも心わたりより
秘 薫乃詞文の中りし行なく
けとや
うのは言し見たり志きうりて

義 白文へ問ありて我れ沙ふ紙見
みて紙へしとや
さとりしめありて心かうくを
義 六義の事いくへそむきこまかへ
あらんか弁せいしとや
しろすへみて申
義 薫の好文ちうぬか白も志り給
つりとや
抱みもらすやと

河 ひとり〳〵をも抱ゐふうるや世中を
みたりあらし此我身と思ひし
秘 薫乃心中に思給ふらむ道
をおやこゝぬるひ此哥乃心出
きゆる也
弄 ひとり〳〵をも此引哥之
義 引哥同
不此めし侍
義 薫のちと風流めく也

いとうけしく覚えして
中君の心也
さりは心うをもおやゆしく
秘 中君の詞
さてもいかせうも杉侍しおさり
へきふか
秘 引とかん乃心よりてまへの
まつり
義 さこ此葉は宇治の所也

志り入さして
秘 中春也　九月ふとし之
津いらのかりし
義 九月上旬之
なふ世のゆうしかとつらくしく
義 旬へ中下旬及ひ之
私旬もうけしろひまて於り
未とかりへし　数ありぬ然と
多りといおほとん也

むかしおりひ出しく
義 大春後芯る去りて丈
世さりやおかころり
義 中比春のころされせしう
とあると
そ秘てしつとめて
川へ入すふまつきて葉もなり
まて蘆中へ入之
あしすや志のひいなまりのへく

花
あしすやハ乃のふ事なりハあし
すやの心を思ひしそよらし給をと
らへのこ給の語をとりた
おれしてあぬうさありより
あしてと給くまて思ひきし
りや給らんちうくりてらけ
給りささめんとうさ御第く
みその内へ入給ひ
秘
まへ乃かきさ乃詞まうらへの

事をとしてい思ひてしそよう
らめなふう世の折ふしなれ
ことくしとの語しとあり
誹
中君れうらへ思ひてようは
庭しと給をうれのとり
あしみひて思ひくとふ
詞ありあよりうら文
義
おの義とも同し
らしし恋く覚えをつきにもあぬを

おもうは如し志まあはれなく
こゝろ
いとへすへき心地もせす
中君の心
そのみなりけるか
中君の詞
すこしいとこちりあはれは
薫乃詞
いかんともたゞほしいそとらうし

薫 昔うはぬしの時乃ましく
色みしくの法ゆかしを
秘 大君より
月ころはくやしと
薫の心中をとひつゝ見
せんとなくいかんしともよかん
つゝみて
中君はん
なかしむあよこし緑きつ情れん

秘
中君は心なり
おいなりおれまゝくし
薫の詞
ひとしすらしけはころころ
しかり
中乃君は思ひ薫の心
みしおとりとも
義
むしはそひつしの時はす
く風きこゆるけよ孫なかなり

引
なしつはかくはとひめよ侍らし
をと悔よしそ孫なりなれ侍るを
義
引哥曰秘哥引哥十七
やとうをうそ表めるそいと杉し
きや
ちくはつひし　女房さ
ゐとをうそきこゆるを
されは中君の心さめいとあ
きとかり

むかしよりあまたまゐりもとめかまし
義 むかしも此ためし外にもありさへ言
もかなひたしかりれやりして葉
の諺惡すかへし
やうのまうさこと咲うふも
秘 弟子地なり
義 何とうくきやうらしと杜もた
せてもとくも弟子地
うむ為君物りし人め此あいそ奉をと

秘 葉の言はなかさ毎之
義 此性のある処葉の為なり
なやましけなりゆゑまうか
義 懐姙をして秋葉のしきを強之
いとをうしと思ひしうりつかう
の志うり
花 懐姙の世此志うしの常時なるさ
秒 懐姙此為常之義
心やすくしもいありけらん

義うきめみて年月のゝやまもとうら
ましきと也
さらしく切りは
惟分薫のまうこゝろをおし
らゆる也
それなくてのまゝと悪しきそ
義怜しく校りひ志川也かよせ
うれす悪しきと也
すこしおもやさ

中君のさ母也
おらまあれそりともまえしと男方
我ひとり
義面ゝ弟あまといつのりうく云り
是はめつしくにて紀なきり
宇治はいとつまおり帯は
中君とらく中の母はしく
義志のゝ事
かやうに中君は薫の心うくる

ゆへなり浮舟事なとを思ひおもし
て中君の引合すへき
まことはいとふかき所しをとりけるなり
養 薫より中君へ
薫 いさゝかはかなきいつみちれつ中しけるを
花心ゆかしき秋の花なる
秘 花をもてやつしのゝかはありけるを
義 むかしはさてはいなひしをかはりは
中君也

ことゝりしるあへつしさしたるすむ
河 身をはしまいたしるあ物をあそそう
をいりしるあへつしさけなれうん
弄 引ものまてもの
義 引ものの目
うけたまはりぬ
秘 始めなり
あなりことされなれいさと
薫の心也

すなはち世中をさまれり
(義) 中君の心を兼のといつく
らんや
いかしへよりいとおほしまたりて
(義) 兼の道をひかしの時
さかりなりき
此文られまて行ひなし
白文此中にしたいて
あらはこそ心やすきさ心なりけれ

(義) これをえたりし人ありしまさしまさし
おりそてむきうそおえあらしと
いふへく
このうち心ふかけなり
(秘) 草子也なり
またんにはるのはしさは
(義) 大君のうか
六統はよろいれそらめくめとも
行常ゐ

義 大意の事ハ大かたこゝろをまとめあ
はせたるもの也趣はさながらしめすを
あらはす事よおさめくし侍つ
義 よとも意の心を
文まうけせぬひめと

義 句は中意ハおかしきやうを文
しろとは心ハかくせて
意の中意をとう縁みつらめ
心みそいふして意しきあつに

句文はおもしろく讀らし事よ
しましふさとも
秘 何かハ心つくそいうきさ趣みも
中意句文をさらしみ縁は
さる文
義 それりし人よおふく人も
意のうへ
きこえをあ引てあらはまうせて
何 うきこゝろしきうしをあ拙は易かり

義
うしやゆうしきこいうみ此泥は
川原同胡ハうりをうりら年
前く只今のありしいありり次男白
家をとこのまへ也
いとあはれなりうたうしく
秘
白家の浦人之
義
中君此心ハ津しきさ毎夜家
敢よ白も一限ニましく笑年夜
かのをとこのかたうし此笛
秘
葉よちらすのしや
めつりしくさへ
義
白此れ懐姓の事
うらとけぬ所
秘
六君のゆうこや　義
かくのこととよりきさてやあり人也
中君の心
秘
男ハいつまとも弁説あるものと笑旨
おつく之解　義

あからしなりつかへの
秘 義 葉の事と
言の葉をあまたなるへと
云ゆしに歌へ詞を流らし歌
つまともそれいふとおもしき事そ
もとへハ此白文はつくしはいさのみか
いまとも今ハこれをしくものや
きこ事と云ふう事なりと自
よりしも

これはゆきかれのことめハ
秘 さきつりさへハ葉よきハ白文の
歌末をとこそ於もへかれとや辞
たゆめしそへきとあらしほめ
よ
義 葉のよへ乃すこ中君此人こ
ゆむかハ沖歌のさすの摂感之
むかし乃人まうとくて色無し
義 大君よ実事しなかをしし事

久しくとゝしかゝらん事は
秘 白妙のころもの
義 白妙とうしおもくは薫をも人の
たひ明なとしてはいとおほそれ
よ白紙ならまつりすゝむやなり
中巻のしかゝそ
如此人のうつり香
薫の餘香を
うのみられん人ニ

義 是れらは心よりつきころの白妙
なまきの足又好色のうへ心中につく
事とものうへし
いとふりしと哭しくる紙
中巻のさ由を
さまこそようおしすさぬゝか
義 白此心なり
見く乃作そなとも物えくろひて
帯まとい

（義）抱あとハめきゝくすへとあふし
みゝ也
かたりあはてゝも何しと
白のくつかへとゝ何也
かくし身なてさき一所あさき
（抄）中あん也（義）
せうきこゝろさ由てし所に抱紙
（抄）東宮にも立めて浅井はい立
后なともあへなる也

（弄）さぶらのほやゝり東宮あなしとり
なりともめつとの事也
（義）さ由てとなり紙東宮にも立給ひて
とつる義ハ思て只中あん人
よりて成さ由よせつ抱紙也
まれしてさ代よりと如やうりうら
そむきもきつこともしそ何ほと
（花鳥）人あまハ称さ花しさ代よこ立れなめ
つまたきさゝしも何とこのまへ人

しゝ葉中君は我をも君よりもと
さこそありしむかしらまし侍らは次は
をかなさけしとうらそしきこそ
有き事也
弁 川旁同此哥は心のやりようそ
忘まじめなとし思ふきつゝしもに
こゝろあまりうし家流中へ去ともいつれ
きこやしにつくしきのいなく
りしすらや

秘 川哥同歌しそさえよ忘れ給ん
あまと忘ふきいりしあしさうるまへ
やりは中りそいかまりつり
うろくしき事也
秘 葉(小ゝき)しつ立后は事あまれすへれ
あんくうすは中君は打とも
事いなしうる事也能かは
中君の我男はさきくむらつ
きこう抱とあまと忘かあつかいあ

まり如とみへ〳〵おゝし
（義）花鳥の使又秘の小書乃義也
何引歌同日はしるさきみとれ
此形てりゐる人へあしはき傳也
されば志けれ〳〵るとく柿のみとし
〳〵よりの事なりとぞ何ともてうく
白のくのふそなれは清生あれ
白文紙その也かりし中とれ
かせもしうりや筆はすいて進めるへ

まうし筆の事とおもふしも清書
てらしみのふなるを白文の六義へ
かよりて我しもさたたりし三巻をあ
とて筆へあいのふなりよしのるふ
事也
秘義の義て用く
又清んとこさすのふかりけ乃
（秘）いくさく此乗りと世ふゑあしきか
抱くとゝ也

いへのあさくいつと祈りて
白の神をましくおもわしけれ
中君はいかにもまなくておはすなれ
白文
又人よりあまためかの御のこゝつりき給
我身にしめて眼つかるな
義
なまめかの神と心ひとよく純熟し
ての事とく一旦の事にあいあると
とぬかくらしむかの心ありけ中君の
こゝろへをと給ひて此奇なりれ

不て及
いつくいとて
いつくへさきまをとなりあまたと也奇なる
かうんもいかくなれいかくあつかへし
化中君
かんあまためかの中比家ときのみしとお
かりそてやかけるあま也由
弁
かゝかりたてしまそくへなり
みあまためかいまはあれかる又うち
宛
かりわかくかりくへそれをとうり

うしとさへいふなり

秘

うかりけるといふはつらき事なりと云々

此哥も又大やうなりといひなし

まの心也　義

義

是は此事をとかむる也　當て義歟

あるへきかと云々

うきを忘れしと

秘

かやう成両首も心ふかく

つきと云々

義

白地心也

まことにおろそかと

白の中善悪をめくりて清浄

心なりけすらあはれと云々

色めかしきは人なりや

義

草子地の評也

くはしく

白地心をもつて中善悪について

しるへきや

又のりを心乃とうふ
白のとをり須て盟舟のさ母む
佛志つしひなきとさいわりう中く
秘 六君の佛うきれめう川し
なりと文義
なへをみうらちま志り
義 花ハ葉よるをきりぬくとくう須
を未ようくへきとめるを
義 ちハ性しうぬ故なり如く

君ハ尋ようかうすをとる
あかや
義 秘 紅え葉えいつをりてを
君とハ仲君くなとくうハなよう
り姫も　弁
何事もいかとうりし
秘 六君の事白文此心ゆよりと
くらへのつよ恥あきとらむ
さうりなうへの什よそひ

義 六義の心の事なり
もちあはれなめり
花 きつらしくもなき心也
義 心さし此ゆへきこゑなりしくみな
さうくりと也
まろかりつくろしく
義 中義の雅也あなりしもほとと常き
くうとあり
しら露はしはりりかなと此いらしる

如しぬ折りしふ
義 白此心也趣ある中ー義へ葉ゝ乃ん
ここみしもあしして我心なり
ろくへておみすあらしとうつしき
又なも此あかりしてさしぬ雅なりて
心の事あへともさらもみきと也見い
趣別のまーとつへつま末よう空
こり
あいきやうつ有らしぬき一肝

是ハ中君のさ母を云
あれをたのもしきものにおもふ人
のけしきとみえて
秘 花实なともあへ人へちうるものそ
ちり川きよりみえくしろめあり
おしき中君のはさ母文とあり
ちりきみつしこうきり
御厨子 小唐櫃
いとうしのこいあし

薫と中君よそしきそて乃こそ
あはしと白ハ笑ミ手く
うれ人のあらしさま
秘 薫のことあり 義
それりとえいそ給ぞす
心のかれなくして我二条院よおもひ
すのあり
六条院よいにしへをそこにてそこに
秘 こいにしへのゆうさや

いはれとにつりかはとものたまはん
とつふやく人もあり
義 中君の官女此六条へはみのま
けきことそしるす
あるとはおりしもとす
義 句の二条はおのかす事と葉の
心は何とさん詞まはしきん此
あるも
其の心此をこる毎しく何し事そ

りし
葉のたかくすんも奇特也
りし詞やまくし思ひそめし
義 中君此歌よまれしとそふく人のか
やうの心かなまし事をとなか
くへきとし
さいつ人とえおもひすてさめり
秘 葉のく詞にい心有しものとも
中君紙すて紛はさりはしま

しきしを　義

くれ北南のかたれ北

秘　中君りさつて母人をともなり

うきみて　義

母女乃御たち

薫の母　女三宮

まいのうん月のおもしけきりよ

女三宮の細

弁　薫の道心すゝみて八講なとさせ

たまし事ありこさも北法

りをけ九月すとなり

給ふつゐ事とかへしき

私　九月は毎月なれは法事なとし

義　大君の法事のりとおり

私義の義かあ大君は霜月

ふうせたまへりとみゆ是は例の

きらん月北法事とあるは

正月九月なとは斎月法事

りや
なふかきらしとしき
葉の詞くまさと深きよしなるよ
へりとしとえいりきてこしもしきさせ
めとのうふ教え
ことなり寸あめあや
いかもこそあゐ成へし
見ん門らしゆまてしと おわしきかうち
ゆまとしるしとけり

秘 中君の清料也 葬
義 中君は清まてゐは葉乃まこう
みしてあうちゆりうるを
もうまは包はなるもけるよ
葉のまてし也寸あゐまいは也もし
ゐ毋はくいふしとえ
ちし地もりあうい
苑 川らし地事え
葉 むすひきの契へしたうわ紀をと

いく一さうたり俗やいすり
秘 勝の常なことをみんするのとなよ
い跋ふくおりしおりしたるなり
とや我身すいうしもへさ事しを
あしとえ
義 いく一すうはい勝の一川あると
云り下此人は跋へしとするい業の
まり抱身てもみかへきみを包へ
ゆつつましも心りしそともさまは
我身りし此事なれい中君を一
すうよ恨むへさやうなりすしとえ
面白し
大輔の君とて
宇治より京へ出る時前読し
人也
とまあへあさ女の
義 業よりまのまひつりすき女かりま
つさと此身気なしねむ結構な

らぬとぞ
はまでしめは
中君もまでしく
佛端んをさせ給と
白比おほす家なる中君へかんを
事ゝぬらむ
つゝの事みそめ申さみさ給は
薫より出家の心はらひ細くの
事なりとぞ

くみよりちしなし給へれど
大輔君の中君へもかんをまゐらせ
くてよまうちはらひとぞ
その後はしめぬひ
ぬかめもありしとおもひしみじう
なまへちゝつかはせ給ふとぞ
はまへちかれは薫も佛らんへす
きゆへよ侍しふみとぞ
ならんなりぬそ

こくしきこ文あいあつゐかりよ
きこと也揖譲イチエルヒトヨム之
何事をもうしろさまニ而
義 中慮の地たより如くさ人ノ義ん
あしていあしと也
拚 中慮を謙らいらしろへ人と也
云いとろなるの地ん地し
義 白ふあ也中慮を慈切なかし
あへしとし二成り成事をいえ知

強いあしもてとつりやと明り
ええよそろさしく花やん雲いかり
義 白也心ありい風流かりあしと也
白文事 義乃事と秘説ここ
おいかすへのさあ事度
義 年生地心つるとより汁慮い庭
よ事やり成をさつ波ハくる
粒不足へよ足子と勝へし
拚 中慮代どろすのつ也

秘
白妙は中差をは一限と定めし
めすみよりてこそ風雅にもた
くゝみすへしと也
いてやなとそいひし事ま
花ことわりなくめれめれとなるは
家のはしるとこしとをなる所
やましきしきしゝやと也
秘
不足よ乃ことめれとなれしやす
とあり

まふかへなしとかなりまわきやうかのね
是は抽出こと此秤をいふ白妙こ
まり故事なとはいふりなる由在
まそれさみつゆ人なとしい阿
かる事なりな山里なとしりて
しそらやましそてもきつれうて
いすまかみつわ等すと中差出
くるしくおかす事ありしと也
まてこ乃法は世もし　引　書

さわらひ

六君のはらくこもり義
中君は此法はいよく白文出ん
中家人へさとしいうくみくくてこそ
らんとたつりしくおかすと也
うしろんあつりふいみくろしきさ
くしうりへ天
薫は中君の心をくしとしりる也
させうやしれくらしくしきとのれ

匂宮のしこそあつりへいおのまの
しき事と也法まいあふつかまれ
いかしみへらしくし志明ゝらは
法白人此目りしくてみみとう
むすへやわらんとの周様なり
とゝ也
いかに此又まいのめやまれさ由なら
秘
おまいとりあへぬ抱とゝなまいれ
とかくみ躰文まきてくゝくまいつせ

まつり
あや乃れう
河 綾料　多事也
秘 綾を織つき料也　弄
花鳥こいとりこんの事也
此義しをそこなふにも猶かうき
こし給へす
弄 薫の事　秘
義 白らしかしす栄耀の人なり

此みこ乃御山ずみを
義 いふの宇治山里は俄しく
此物しこ事を薫いみなくひ
なひうらみおもひ侍りけん
いまはしと也
いと物乃人なりしやと也
花 前ふりなくいはれ給て人めん
なをしなき事ともを知給也
弄 宇治のふるまひのしき様を見え

おもはしてよりける君女人の
こゝいと物しとなり
秘
草子地くよしなかりしせまし
事とも
義
作者の評之
私なやにさしくよりひし
き事のちうりてり成
のよいゝ文もいと打きこと
ふる

かくて打いつそこしわやすく打と
あしくて
秘
薫の心なりと
薫のみちのしるみなり中
君へこゝろれしなきことなくて
るさとやと思ふく
はとへまことめくみれ
秘
中君の心よいひきめしへまい
うしとも

さゐこれ日ころさえりし人

さまことなりとは葉には中君を

兄弟なとのやうなれはちかき

ゆかりなりとも申すみ夫婦の

間なりてはなくてぬのみなとは

いふへきをとはさまへこれあると

いふ也

あはれとえぬよは

葉のあはれなりの心比やりしも

さすかなんとまりし文

あひなりぬへくまつやりれ日本は

これあるらし

花 新枕の人とも之

抄 皆新枕の人ちかきや 箋

弄 なしめてわかる人なとなり

いは中比思の心をきかうやう

なき

みなとこれとては如何ん山河との

新 みつへてそ心よりぬく
義 山陰よりなきてつたふらんかの
こゝろ見とえ
おもしろき山へまうて給心ぞ
義 大君のおはせは薫乃中君へ
心かけしとや
あれ事いとくるしくおほゆ
義 匂宮の人の心のかゝりよりも薫の
心かけまふくるしきなり中君

んなり
おとこ君も志のそむきかねて
薫之
さてそれもしは志とは
とき給はいつらんのちあらしや
うそ前をいつくすゝ 蘆紀也
あみされおもふあへき紙
義 薫の心おもふま
なやませ給おりは志うめ傳なりとも

義 俗の事か持ちて此時のまゝ
秘 蕉此利醫師 僧なとの類なるゆへ
持のこゝしかり
ちかしくかゝりしとありて
乃らゑ
表の此そうのさに
秘 か持の俗也
花 か持すら人を兼居也る僧と
いふも

母屋のかひさし如くし
人乃くつろきもえんまゝえんも
秘 中元の人林樹也
義 ゆらえんハ揚屋くいらし留く
人の不審此ちをいはゝれいらく
て對面しまふく
と云ふし持のまゝ云ゝ
蕉乃心中元の茶のいひ
むしれ人のかやとそめまへらし

大君は事のおこり出しわさをゆ
しくとおもへ
あら猛くしけよちろつきくら
一よは時のことを
いとくるしかれはまよりめしとた
れして
中君乃心を
かねていひし人を
かね君いとをはかりしきみつ勝

のつて
むかしはさくいらかくらし
帝みなおもしろい明事並
ともへをちろしとんころ
薫の詞
井あ細りもまつおもしも帝みそ志て
やまとうぬ
あまとり此下やまとうぬとうふを
あるり乃みもこゑしさうきり

弁 下座ともしぬは中忠臣んと
みゆ
抄 中忠也心となる葉とハ不義
あまとも非之
私下やまともしぬは葉せんとは
ても死之但め句門弄
及さる也
いとおれいろしもつゐに
抄 葉んの初也

へまとひ侍しかは
抄 懐妊し給ふへき其期を君の
とへつる也
義 神ことの葉後には
あきことひしる也
いとさうして
抄 懐妊の事をとをもちる之
妊はいつとなくかくして侍る
草の人も

秘 中君は昔の人へもとかた大君々文
なくなれましき人へ乃けりてさしう
義 大君も胸をやみ給ひし也
長病なりけりしこさ人のうわう
とへのいひをしと也
帝ふ早れもみとせは相ゝぬ
うくるも世のうふんりしうふぬう
誰もみとせは相なりしなりくに
秘 河哥日 義 河哥日 妙なり

弁 哥也
弁 河哥もくも世の
紀のしよせきうる人はきくんもはし
秘 まゝ也歌
少相なり
弁 はしもすなりし中君りうは
哀給やしよはよひしく
ふは流みてもとりはり
義 中君い心えまふ屋うにつりる

しるよし
帝にありしきはんせんにありと
義 かねて心ありいはぬ物となし給へる紙
とはり男子也
義 あまめのなをしこ紙
大君なり
いとはやきまもし経より世中をと
男ひとりを事也く
秘 業乃頭也

義 業乃心いつもめせあり
うしろ抄しさるあるうれ
義 三年こき抄しトアリテと
文字表し但古本以下下表
し本被見合処に本にはとき
とあり河二年本出入ら本と
頂也
秘 大きみもりこころけるめん
し事也

うれかひのみちをしまんかさらはや
しかりきん
大君は心かけしより出家入
道あるしの心はやみさるえ
なくさめかたりまつりあまりしに
ありし
大君の忘れかたき有かたさ
然あり
はしたりおかさむりすれ

大きさみれ事やおかさぬしらあ
まして中君の心もあさし
心のほしくさ此律よるぬはれな
まり紀い
大君此忘は忘てもあぬ中へり
すきりぬしきさやりて中君
の見えすともそく　へしめて
なりき
よのへみらぬんれ花と

(義) 薫のうへはなかの事也
うつほにあてきみをさしていふ也
(苑) なきをもひとつ詞なり
いふなり
しるめてくらうかきこしたる
(秘) 中きみの詞さかさまにいへる
松ろかす事もありつるとよ
(義) 大きみ人々まて薫のおほせて
うちかへしゝくへきとよ

みる事したまはん此待しかれ
(義) 薫の実は又志乃深切なる
事也
(義) したはれけるをまちおもしろし
ちとこうしも中しさきかとし
見えましきがへさへ中きと也
さやうなるおりも思ひし侍ぬも
のみいとうしきき事よ
(秘) 薫此詞中薫の事より薫によ

まことまなへとハ支ありし事
をうしこ死事よのあふとも文辞
さやうの事もさて一度のなり
なのりしなる事の事のあ事との
あふとも也
出乃内山内といつてさらいそれなり
うらりして
む
宇治の子孫元成ハ後の世忠
為なりなりしときへはゆつり給

庵ことつふんなりのも葉忠大將乃
秋もさこにそこうらひて出ちり
為待るんと思ひしなれめり
あふちうせを出らんして志給
うこありてしうれとうける
なり
義
松村義ぬる
宇治への事ゆへしそこてましれを
めしられとも也

秘
らうらうしてとは花れも山里庵
の住居ふしその姿つましき也 弄
ゆらんし志る所さありて
孟
を離れも心あらく思ひしめす也
なれりとさそうにいたひ侍る也
そうせともむつましくはおりし
しとて
山比の紙くしく
秘
庭の山興へし 弄 孟

花
二条院の庭乃はき山なり
をうしきこはなみれしきとなり 秘 弄 孟
かきりさにあなりて
川なき河に同し
河
悪しき住のうちりさにあなる世
なりせはつきを志弄てたなけら
さらしも
言うし比住とりしあまりしきを
河
悪縁わく孫縁さよなみのしるしてく

いはこなりんとさらしの里
苑 紀伊国の名所也とさらし川
ともあり
秘 川音河に同弁同宇治乃山里
あら紙出らしそへてのまゝ
義 川音同此音三室乃白浦から
奴为也愈よむあしきをきく孫
ときになんとはつきし紀
奴有りくしあり

一の此山さと此里とかむとふ
秘 宇治也
義 宇治の山ノ里をとゝらし此
里といふあしりき也
むしろ世中人さとも川らう
志ふもきとうて
秘 大君此事ノ義
弁 或義あり 見河海一義たり
一云宇も菅此人乃ありしと

いふん也

河 白氏文集曰香炉峰北有寺
号遺愛寺件寺者高宗皇帝
有寂寥王子至七歳忽薨不堪
哀傷建立堂舎王子所安置其寺
草堂記

一 畫圖事漢武帝初喪李夫
人甘泉殿裏令写真丹青畫
出竟何益不言不笑愁殺君

白氏文集
歐則事武帝以薫中君李
夫人所作以温石

あはれなる時は緑のひよ
秘 中君此心也
私中中君祠也
義 中君此忍苦也
みそそみさらし川ちかき心ちする
人のきくらん

巧
意ありとみゆるは似せは巧
神ならはさてそ如よもありとも
人形と云物なり作者ていへり
意ありなをもつよりは作此道にて
たそかき事也と文川号同

秘

花

花あるかゆゑなり人とも紙もなを
物よつまてみえきは川此人形と
いふよせて意をはとてへしもうき
事よあれともせしかしあり

まりまかへ物いてかし侍と
ののよし

弁
意ありこみつきも心きよらかに
ぬ事なきはとこたへかり似
あるよ心なりまり言同　以上弁

義
私花鳥の義なる
此様の人らいは居らてすつる
物さへなりては大君此人にて
いとおもし文川号同

志うのりともかの志しもしきしなめ
しろめく也

抄
昭君かことくあしくかたきなし
てやしとや

弄
昭君か出しくかき見へからのゆ河
まいく

箋
昆ハ蕙の行列しりし畫工行列と
も形をとらくへしさまとも
似とい曲りあし又無くなり

かき見あさんまいろしき紀いろし
あさしといふ也

河
蒼錦云漢元帝宮人頗多嘗
令畫工圖之有欲呼者被圖
以召故宮人多行賂於畫工王
昭君姿容甚麗元所苟求工
遂醜其狀後匈奴求美女帝
以昭君充行既召見帝悅之
而名字已去遂不復留帝懲殺

畫工毛延壽

杜詩注

そよりこのゑもにもしもいゑを
かい心ありいふまへき
秒 不云不知しらいはもなき
我へしとえくいふ我も中
君の心あらよし
ちう花世あり花ふかせさうそく
みも侍りけり

河 也これゑくみの事也とらして勘
付琵琶弾遊
花 水原云也これさくみいかのよう
うしけるか女御をしなくくく
こと代はうつとうれあるに
しふもううすようふあまさた
花をとあをらふいいけの事也と
いう琵琶云也さ乃くみなる
あうとに花代あしせもうして

弁
御なりて花のかせらるゝとあり
ちゝて用此義　花鳥
秘
神変を現する所ありとも見と
明星
義
我死人の心をまとはせ給ふまし
あかあるきもとみよ思ふ也
いまもうしゝちつくまうりより
て
秘
中君なり

義
薫の深切なり大君此事を乃
あまりに心くるしくて深却君
事をいひあへとて中君此
ちらし居たるを
人のこと乃つゝみにもあやし
ふかうおもはしき
秘
中君の詞
義
此次ふ人の志ある事をおもひ
かいさうる也

新 薫にかゝるまじき事を忘るゝことし

む 手習の君は事しもといひあへんとて
人々のはゐてみとゞりけり薫
の人は事をいはまほしくいはれは
きこしめされいひなし給て
薫はつゐにむつましき事
をきこしめすをいひのかれんと
おもふへ
義 こよしゝしあはれかめて
薫の心

これちかき人々の忍ひ人との
秘 少将之 義
さて事ありそむ
義 中君の手跡とはまいらせ少
将りきこえてしとゞめぬよし
妙く
としるはせりやおもんとも
秘 中君の頼も手習は事と
かくりおしはかり

義
これ毎乃まゝく
せしつゐそうみしを
弁
中君のうち人さらつるゐらしを
うしくいもうしまし給れと
義
若腹のいもうと也
うらつけりむつひぶかんと
義
腹かはれ若教也
ゆかれしりおほしきりみ
大君のくらうしあつ紀り

歳のうと也
うらみ者しうり然しハ猶めかれ
秘
中君は我あまりいらく大君
まねらん人ありと也中君紙い
さなるゆへいて大君なりしも似
あまりとも思ひぬあまりしいう
弁
中君をあるのかみなり
薫のつゆとさなるゆへてあと
はとあるはよしとつてやよけれき

秋はよく似たりとぞ

あさましくまてなされなき

（む）そりの字ありとぞ一本文あれ

作者はまてなされば似たりとぞひ

うち心如へし

（義）花鳥まてなされさりとぞ

むなき也

ゆめうつゝりしもてなし也

（抄）薫の心也

（む）薫乃返ことうけしゆ侍る也

（義）薫の心返りとはまことにおもしぬ

これやうりしにはりくとぞ見つ

き事をいひ返さもうつくしきはき

またあととうふんく

はかへきゆへあはいそ

（抄）薫の詞　義

いさやそれゆへもこゝろあられ侍りきて

（抄）中君の詞

義 いかなれともなかなかなきことゝ也
物もなきありさまとゞまりて
抄 大君はおもなせす物もなく御事
は中君の秋月記にしのより
なまめかしと也
私 花は八宮の姫君たちあまた
たおほしとゞまりたまへるまゝを
うしろめたけなりおぼし、
と也

あくひとりにあつめて
私 あまたしけりつまとも中
君詞をりやうけたるなきさまま
よそのこちなりひをれく
ひをやさしんとのかよりて
兄弟と兼の推しあて
又おもなきさまとゞまりて
秘 我身さへあつまていひなす
ことさへていふや

乃かみむかしきこゆるよ
秘 薫の推しはかりて
宮のしめりて
秘 是八宮之弁養
悪婦草はみをきこえけりかなか
一し
秘 藤瀧腹あしき如へしも花
河 むかしをとかくのこゆり
あめりをは何ふ志のみ此草あを

はまもし
秘 弁養川哥同
うつりたりてはあしくれ
秘 薫の詞
さすりたりうくりつくて
養 中君此乃ちりなくいはむとて
いひふくて おかすや
まり縁人と都はと心あれ
秘 中君の詞

くりくりもえたつすや
中島もさくらもぬともや
何事りいふ心紙らりも
義 横神をくりしやさいひと
明り
よ紙ゐみ中ありしを西北ありけり
秘 蓬莱山をいへり楊貴妃のり
拜 方士事
義 蓬莱事しく　桐壺一巻にかさし

事あり西のけりつきつりによ
つまも猶來之
河 又旁求四虚上下東極絶天海
跨蓬壺最高仙山上多樓閣西
廂下有洞戸東嚮闔其門署曰
玉妃太真院　長恨歌傳陳鴻
秘 いときりそのへきうちあらぬと
此人を尋ねて尋ぬへきそのれ
何事ねとなくはめりくきより

かと葉のくまりすり
いさやいかしへ乃はゆかしも
秘 中君の詞い文の御子をさす
まへ行いたりしを
くらうけもて
河 口惜かるへしと也
中君の中いはうるさき事なき
と葉は此御志の切なり御見えて
しそうくやそしもやせらる

いときき所は
義 常陸よりのおもしと
花 常陸国をいふ也
私 常陸介とは陸奥守
なりまさこち時よりくして下
りけりや
母君へ此うれしき事なり
思ひて
私 くわう君の母いうへ毎の御ことに新

おのかなをしうたもりや
義 浮舟を中君のはらからにこそし
ゆへかくよく物語しと也
伝よりうんいゝとよあき事
む 薫の山里に住居るゆへのおそよ
山里に住居るといへる詞よつ貴て
乃あやふ之 義
義 此おもひはうかれ毎乃事未終あ
しんかい我心人つきかさ

しる佛末につうり縁り
うきれとくいへる道不吉のゝす
ふ乃まゝにくゝらり殊取代い川
へあるは物也
はゆてこそてうか
うまき詞をかゝそれゝらなとい
まてぬとか中君の詞也
さりけるそうくうなきに
秒 薫の心也中君の我身をも

ろうもんくめとられ様し給ふ
也
義
あさましき事とおほえて思ふの
まへり抱り
義 中君此心薫のあはれさおほく
けさりはけしくまくいかんなき
め紙
河 親澄也
義 親澄くあはれは出つしめてまふ

まいえんをぬとと薫の我なれらう
と中君の出りまへりと出也
らさゆめそ入めへ給ふ紙か
秘 いとま出ひもせましくて入給ふ
あく
義 めろさせて中君の肉へ入
のふく
なふむさらはふく
薫のらりのふさ毎

かくのごとくなりてハ
義 葉の歌と仕事ととゝのふる也
おりふしてもんじうの心なり
和歌也　河練
私 「意ハかとまハ葉ハさのゝ練をはか
明り
花練洞練し
よみく
弁 「葉ハ練し　終夜題に尊れ
こと心なり
義 「好色ニ練しよく人なしハ結句

くハあかりきと也
にゝりと乃あひ諸の人も
義 浮舟之　葉の心
まことにはみちへお
義 云なりよくにつゝら紀氏をみさ
きと也
かくハあし給も
義 ○とより腰すてハ駕ようんハ座
まとうへしと也

人のおいらかもあしすか
秘 まうけよりあるかる横なりありて
いとも
形を取りさ面には
義 しえ哥のすゑに心かいそかむ更は之た
中君に心地かく見えといふなる
いとむかしと給くすり
秘 大君此事也
はしくらは

障子なかへさえ
いとうしこれと
秘 弁かさ面なり
弁 さし出る事をいふ
私直に篝面かしさあいるいゐ
事へさしいしるてみ
くるしきあるとことりを
中あるも
いふあるぬ給ふんと

抄 薫の綱
人々くるまにてあいなく御ゆか学す
めり
花 秋好后の事をいへる也后宮行
たまへく
抄 弁か綱かゝ是大后白家のゆへ行と
ことをかけさ給ひけり時まてみえ
しるへ人々くるまにてはへらく
ぬるく物むをあけしるしにほうゑん

あまたは葦はりつゝありしき給
いさゝかもゆかり此まゝなる事ありなと
つしとくし義
弁 秋好中宮此事なり物云給
ひとしくの事なく
いりと給ふめ中にも秋の風は身
みにしみく
河 秋のゆふいとゝ物おもひ此風まさりは
身にしむかたも人の為しお

事みな此うけ給はる世語なりけるもさら
きゝ世中のあはれありさま
義
大君は三条の宮をかせまひしゆ
をとゝめいそくもれもかのこと
六君の事出来てしらる又中君
の心ぐるしきさまをいふと弁
尼か出る也
私中君只しとて六君ゆへ物思
ひしけるへあましく給

まいらせ給ひあはせられたる也
弁
中君の只今の物思ひの弁
尼のしり合られけり
さまくふちん
是は大君と中君との事也
うちかくる詞也
とある事もなかれけりと
秘
薫の詞也我身中にゆら
さしかりは一人の身歳

なりとも
あらまほしきは紙の事あるの紙
中君此事もしこれみたる紙
ころなるへし
あらまほしくおほしし所を
大君の命にみしりて今の紙
うらはまさを見給ひて失せ給
し事けりのゆくへかきしは葉なん
まりかりやからのやうになるし

きこゆ也
此ころ此はありさまは
秘 白宮此事之
幷 中君との事
案 白宮ふたつ君乃れにすかり
うやり此事はなくてうるまり
きりそとゑ
されとうしろめたけれは
私六君おかしとて中君なん

おかしからぬ事いふなりとぞ
いひてもしくむなしきことに
私 拝侍の顔くされもしぬべし
ぬ世とや
一 れはきこえられ
弁 あみだ仏三宝の清事にて
鈔 大悲仏一廻と仏三宝と云似不
用し 義 仏三回也
私一周忌也

一 ひまれ事のやすらひす
義 此所をうれへとらいつるとぞ
一 れ山てものきかしは
阿闍梨の寺にこそかし如くし
一 あいくる
寛なり
一 えらしときこ事とききこえしに
るまじ遅き此切徳とあきらか
の中也

むかしの人はゆくへおほつかなく
秘 いふ文之叢の心也 義
河 此屋奇人何処葬憶明年陽
宅初置吞併年人戕家地仙
去双亡作梵宮漸恐人家盡
為寺 西来因判仙寺度致之 白氏文集
花のはいさしもくくれなりしは
義 いふも仏道ま入ける始し事
なきこと

とあり給へる人成
秘 都宮も姫君たちも成なし侍を
都ふかき古寺となしたてまつるを
なを思ひとりし侍りける給ふ
とて 義
昔は宮の御なさ
秘 中の君たちも 義
その宮は領とも
義 此所は白文は沸飢知とも可

廻しとは
ちかくし寺ありあさん
此古寺の地なりしは某つくれ
とは
川つらちかきをせしふもあまたい
義
猿少えせなき心は
秘
狭き房をとらしなくして
此房をは寺ありあしてあり
房をとつへきとは　葬　義

ごさ夜かりけりいとまかしぬく
女ことた此人は
秘
義
何冥業の尽善えて務とは
寝房をとゆ給んせい深笑しいつ
つきをきうりなして志うを仏の
くゝ此ゝ又明しあへた此滞
心をこゝてゝし志うへし
とは因縁わゝりをし
しゝとは

かやと打しらてうける〇をつきて

け
武傳説云観音勢至むらしく

乃子となりて打たちしをりけるに

継母のさめにころさ被れ被は

此のおかやうける〇をくひとり

うけてはねとり仏道に入給を

かくく絶えにありきと

年
見河観音勢至の因位をつぬ

とり仏道に入事をさらかにし

如
河海とりみしぬりこう此心はおゆの

餘打をすてし仏道に趣へし

とかよと

義
観音勢至因位の事出家とかり

なしすとうら心底を其中すとき

継切らる〇をすゝみてから

こゝやこの事く此縁とるて

ちるかお打切る〇をすて

仏よりうめけいとしとてもと

多いしき事なりとも

秘 退ミて 二字あるとも 弊

さよみのたらせれ

注 暦博士 推古天王十二年甲子

正月代年始用暦日

仏乃法ましくのまし

寺をあつ乃様も恵仏流なとの

法会なくし

とうしれなはさうめて

秘 薫の空たきものして

さ乃ふひかりしそいみめと

秘 薫の心ハ腹蔵をさ爲川一きと

称とらハ 弊

さん爲をさらくて法らるへきやうし

あり

秘 弁のめのとの旅なる儀

京北家より日まく法りるへきおもしれ

秘 中原氏ま女

義 いとす抱ありしいは底乃へして
流らせとや
右権大納言の君也けれはありさゐ
秘 柏木也 義
めつらしくいもりしまゐらせん
秘 薫の誕生也 葬
うれは世よむつましく
秘 と薫也ありけるをきこえ侍るな
柏木にはよろしやけへかきらく

まつりし陰徳陽報如し
とぞ
さゐしく乃事とみのくすらし
義 柏木はさ大君なとも事也
宮よりもと哉くしれ
中君也 義
おひめ君也りのまゝ
大君也けり
こめりしくいとすくあは

花 おめしきハ人の心も世乃さま
やう朋かをいふ又世の朋くおもふ
まうの海しき心ふとゝまらう
義 此花為義 おもき

秘 巨也　薫の心也
家はれけさハ
秘 中君は事也
心ゆかさらん人はさあらは
秘 うしたる人なとしものはすゝしく

あへきしいまつへき心数そ也
かるも 拜 義
すゝ純なりいつも心ふかく
秘 薫なりいなをけしくしおもて
いかんしてやみぬへきやまり
志めつり光君の心残りなは
きてともらくへまいて 義
由い めしらねりを
秘 中君のあれまふかくつゆひし

事〻 浮舟の事〻
京なりこの侍従んとは
秘 弁ヵ詞
義 うき舟母君也此生京をいまゝ
弁ハ志らぬ也
中将の君とそさふらひけり
うき舟北母とは常陸ヵ妻
八宮乃小方此女いとみゆ
さとやわらんとおもへすゝ乃

秘 八宮はまうけ子とは於かし
あらし也
義 女子ありけれ舟也それ故に八宮乃
志をきらりあり也
記しまたりなき世縁なりけるか
義 すまとよきゝ八宮此記のまゝよりを
なきとありしとや
ちゝさなくとも元のまゝさ
まて

八文乃厭却しゝものゝふなり
さゝしひゐてかれハ此中將君
の退出し玉ふ也
みちのくふかれとも乃めのふ
よく此卷懐妊みく
の給をせをかしられハ
義 いふへからすと比御中將君の
やましき也
さて又きのかにわりて

秘 秘ハ懐妊事なりとしらぬ人々にも
懐よわかりてしられあつ也 義
如乃言よいへらん集り
中君比恨あるへく
きこゆるなりけり
義 浮舟の御文ハ文の心ある御返
給て四の御後の事をかし
くりしくあきつめ
薫の心なり

みかやと男子ふ心いそまぬ
義 能しこゝて薫の心より入るゝ也
むかし此御方のいひけり
大君ニ似たらん人也
かしきへ給はさりけれと
八宮の御女也教ありしハ乃給はさりし
つまと也
秘 母君はこの北のかたの御めい也
系図にとかきり浮舟母中将君は

弁かいとこめい也 義
弁もさてあれぬなかりし
弄 浮舟乃母中将君ハ弁かいとこ
めい也
我のことはかりし
弁ハ柏木ニゆかり中将は八宮より
や
大輔かもとよりき
秘 浮舟の方北女房之 弄 義

かのれをらにしるよ
秘 いふめの古墓也
秘 よへとくまてりてさしつまこる
葉ふそくまこる也
まうしれさへつくきこまて
秘 京氣ちくいなし
とみにとえいそ行はと
義 懐旧のおもこゝ北京氣とあり
くへさ、れいそしうましめ也

ちうにあとすうし記事としし時
あひて
何 木蝴 つきれあくひ元
花 木蝴ハ木よ流きうる虫れ名也
弁 蔦の影也一説 又云木よりそう
つきうる虫れうしの影云し
蝴 竹治切身小虫也 木蝴 玉篇
秘 蔦れ影也とこて
義 蔦の影也ちと柴ふ乃ちひさ抜也

川としせといへるはむかしより
文へとおもしくて
白文へハ中黒のけさへ加へし
(薫) 庵とまきさしたる物すハ本乃りしけれ
なとひ称もいまさひしうはし
(秘) 薫の名残をたのみすハけひし
うるへしえし地して薫ハ一生
とより雨なりしたるまふ乃香散
音生如寄耳とおへるとくい

(義) 法ともさくめさりとも
かり初としる一義とさくあり
あるふ老便の心践たるやる
り
私庵とり末此字ハ庵とり
てあるきしと云こさ此字の心加
へし おりそハ末の字学重
(花弁花) あまとつるち末此本哉やうりきと
たりを貴けの形しのさ

秘 あれかうけをゆるもあまりて
一乗をもわすれしまへ家は職なり
仰さかしけ黄紙なかまへ家中
一とはいひきるかなと也
箋 頴の字か證也
いさかれなくしきあやまりけれ
薫の心也
うきよりみちさそてまつはきまへはなとて
又わかりけるか頴なりあり

箋 宮よりは中君也
秘 われしも白きもわかれしますす
時なく
みなまたれ宮よりとて
弁 三条宮より二条院へ
秘 三条宮をいつきまうあるも小の院
なり気をもみとはいつり二条院の
南なるを也 箋
まいのむつましきゆへそと

義 帝さへしらぬ事ならんや 河
らんと白河のおいすり雅なき
いかにも君はらうしく定すも
目しるなき事なり
抄 名の朝なきを
いとこ此歌詞よ
河 うりのうら峰の朝霧をかすめ
とひつ見をみ世中のうさ
抄 川寄日いとこ此字本めし
後し都なりしてさく晴かくし
とも
弁 うりれそれ前乃心
義 宇治の称也
流中りし侍てしそい
義 彼所いかにも君の知ず人尾貴
所なきこ也
よくもつきなく
抄 白の朝

義 行事もなくさりをあくうける
と句のくのみ
すゑしい事ふさやありつらん
秘 草子地や 弁 義
あからにくのみとよりあしと
ゑんしてうらえんして
義 ゆやしよ詠みしいようけりと句の
弁 おつい すり代知て来へしと
の詠と中君のうらえんする

さ由なり
返事うれしきへうしやうそて
秘 句のそて乃うしかみえ　句落は
みちよ中しきこえ
山さとのはありこさ此
秘 返事乃詞
弁 中君の文此詞
義 宇治のうく
さゝやふくいしらよくと

秘
雲よ明してよろ尚くしーとも
これしなりみいつなの中

秘
茶北山紙りともんへよ是りとなり
こさゝの霜妙く何時も入なき
の心ありうらいかなら人叢中ん
中にすまはか世のうたすの
ゆのしこ流ん
川ら同筆まり叢の中文
つゆへかりれ字治こ文すましな

しとや叢

とろかりすな人と

秘
と後かろれしもつりかへきれ
のかり
お花の抱よりへしに

秘
こと草にかきされまてもせおすく
もとさらきめと
花秋の北草乃枝かせすゝき
かよ出てましくめしく袖とみ捻乃ん

まことにかいてさらしとも
（秘）おほかたはさゆかりまこと秘如此点
せり
（義）傳こ（清輔）本にはまさ又もかへしこと
かはよそに出ぬる物なれはしらしのすし奉
まかゆく彼のかたにさけくして
（弁）古説ありし北落といふなるをあ
ものなりと又云思ふ落と
出へきことはいはて出ぬをいふと

（万葉義問）中にあれは下にはよるなると
えんしてある寄也かりわと乃
のなると
（秘）薫のかほりやかたはちよりの
おもひきてにほふ心は浦すると
つ身と句は推し給ひ志のすく
き二種類別なりありしとこれ説
何り似かよひたりとも見志の
すきかは出つとよめる寄一おかか

し給ふ穂よりいつる劉向かり
と云説非也
義
あしつれすれは抱けるを杉にかつ
しとやまのく杖は中君
のこさまを筆にを許容し
ある本也
なけしきとのけそに
抄
白玄は仲ならん也
あそいりまつりて

うさしのはのなのあきん也
せきりんも云給りいりあへる
義
中君もあそひのありしすゑ
あつり又琵琶をは大君は琵琶
給ひしかかなりししわ
すへし
中君
をさしもつかのへはきしもむすき
かはめく風よりつきそしそしまと
中君は白玄は心のかけり

とりあはせまへつ王　弁

義
おほよられく万歳とあり抱の
ようく六義へ白ハおかしくて仏ハ
りろふとゝいへり
まろ多ひとりのとて

行
大かた我身ひとりのうれうま
ろくての世とも悩つかハ
秘門奇日弁日義日
らくらくとましせしきさ

白ハころかなり
うちはまこそへもえあかさ那ゝ浮
めいし

秘
菫乃事之義

義
菫ハうれ敷よ心ハと毎かんと
うきかしくうらめしく白ハ
定すく
菊ハまくらくもうりろひそて

弁
見むのさ毎ハ時ふ宗のへし

秘 菊はわたをかふせて露をうつすめ
うつふくみたる綿ははらへは心なり
九花の時分よまるゝなり
けさとつるといひてさせるなくては
義 白文は菊なし ことにおもし
まつよりし白文奏よみしより
花 あまたよみけせふみていなくて
まはしと志ちゆひあるしては
かりなけり花いとそうらん

いろ所ゐ一しほにほ
花 菊はいくよの中菊は事に
おかしきことなるや
私 此義如何
世の中に花とはなとすれて
河 不是花中偏愛菊 此花開尽
更无花 元稹 朗詠
秘 此詩 同義同
私 是は菊より付て口すさひ

まへり唐の元稹か詩に
なふしけみこの花めてさとるかなみえう
しいすへてしへ此かきりて琵琶
のきはしへなりけり

（河）西宮左府庭前霊物降居樹
上託前遊小児詠此詩教作
者之本意尽字兼靖琵琶
授秘手曲小児醒々廉承武
之具也授上元石上流泉曲

又天人此也とすゝしへるか事なと
寝覚の物語にもありすこし
紛さくれん此中君とこそり
（奇）西宮左府事なとにもあれ
子なきいみしうらみへし
（同）天人此か有りて紛さかし物語は
ありて廉承武か具のこと
（秘）西宮左府事之親をなしれ
と皇子にとりてうくこれ来

代ゝハ等閑なくもなく箏こゑ
曲ありきとの義

義
是ハ菊なりとはけしからぬ事也
法巴より付ての事之此花さへ
こゝろとハ西宮左府高明菊低
わしころよあらはて時花よ
對して云つまて云人なん法巴の
事そなへけるの紫式物語
また世中取りしとえたふか

并元紫式部源氏の物語を四
種の法より出て紫式部源
氏物語を法花也心より出て
書之此物語よりて法會しける
心なり

法ことわりなきこのふを
弁
法巴之経の物語などいへり
花
ちくにも法巴を法とし云経の
影をみ松風よそこにしつかなる

秘
琵琶之
くらかりしと見えして
中君の心 義
心しれあさくもあはれん
秘
中君の詞之 西の須なり当時
しらんあさくとも傳うる所を
聞さらんへしすとゝ也 我身しも
とゝろそらも道しとゝ也 諸道の故
なりし 義

けしへしりしとそ
義
中君へ筆をそへけりとゝ也
薫しそまのまへ
秘
中君此詞まのまへへ故宮の
御筆をとゝり
こそり此のもへこそまへる
秘
白の詞之
私儒いあると白ゆんうしみ
まうつゝ也

こゝろはみなおなしかり
抄 六義なり
かくさまなるうたかくとも
義 妙心なり紙つくし
う此中納言ともさこむありし
義 せいつれにも人まつに心やうう
なりまそしられましとも中納言の
ほんよせの業中納言もさる
ふるそ定むしとも白ゆし給ひけり

抄 業ハ花鳥の義不審なりし
業平趣しての義あり不用
し
な 此中納言謂離人欲ら尋
月けり
いかめの君ありかさくもはしみ給ひ
し
抄 業はいかくし給ひしを
なり此類ふく業ともいふよく

かへしゆゑ
异
葉はうすみ絵りしと白虫
らしみあるも
ゆゑひまりなれは
秘
陸也は上たりし黄鐘調のうき
人そとあり 异
義
橘のさら処ゆゑひてさうり
されは則一盤渉調なり志ゝ
あるも盤渉は橘のさうりく

さりゆくあり陸也とも黄鐘
なり志ゝ絵ありくし
伊勢わうゝひゝたゝ
伊勢乃宇義乃川支与支
名支九尓一之保比尓
名乃利曾也津未安年宇
加比也比呂波年也川多
末也比呂波安年や
伊勢海

花
伊勢海ハ律の哥之盤渉調
も律之平調ニかきかへらしさう
にや郢曲の衆なりしらいめ
いし
秘
白文催馬楽ニ承代らうしまし
のみや
義
箏の音をおさめてうたひかへ
なり清き渚ともあり
みな心たりしかすれ

義
白文の御事を出らし此ノ頭也
忝おほえをいさいも井人と
義
中君此事をこれもつ頭也
みつりみましけりしけら
秘
宇治へ帰りのまへこされん此あり
とも
三四日ちとまりて
義
白此二条ニ法遅留也
りのとれりからしぬんし

秘 六条のわたりへ
おしのひありき出給ひしかたなり
こゝにはいつもかよひ給ふ
箋 夕顔内より退出し給へり
二条院へおはします也
出もしし前明るさ咲して
箋 白の顔も夕顔のさまにさきつゝ
かくしのめくりへ
むつかしと

発慎とくちをしき心あり
あるさにはとらへりして
寝覚えて夕顔へ白き扇面
しるし之
こと明らかにみえたる難は院をさしてく
久しくあり侍るも
秘 夕顔の顔也此院とは二条院
なにかし六条院の御後久しくして
まうとも 箋

并
此境は二葉抄之
風そへ川つまきさし給て
義
連歌也
かゝるへくもあるまそくへし
つゝりなる
義
中急ゝされ人かんん也くへし
いそれは風の極意也痛乃字
の心也
きよしにおちし　常家おれし

ろ給
義
夕霧をみてくれぬむ也
はこともれぬまゝへなりもかなりま
常れ
義
夕霧の子息れらに似ゝなも
明ゝ也
はむ之よ海りまへなりて
白衣の佛還り来りまへなりを
こゝられたゝさいさ

清らかしきうく紙おりゐかける
よゐま
秘
中君也　中君の心なるを
まれしやうなられなかりしひま
義
六君のこと也事之
猶心やすからぬうちなるんのこと也
宇治へ隠遁のこと
たゞなくてとしもへ猶ぬ
秘
二年此君そくへられめるとの弁

正月廿日ころよりいかにしぬさきま
なりかやるらし
弁
薫廿四才の正月也　早蕨　中君
巻の年ころそ次の年ゝ如之
秘
薫廿四才也　なりさまもしひのよそ
年ころそ次の年ゝもしうつゝ之
中君誕生ちかつきおさより
去年八月より懐妊なり　義
弁
去年八月よりの懐妊なれは

二月ころあられてを
義 ミ宗松引し志ゆ事ゐて
白の鷹肌とめまとりを
語ゐぬ之
よしなしめそへ
始より終まて晴清のことは
此歌乃くとくめって
きこさい乃ふんよりも
義 明石中宮より中宮氏と

かしひのすへ
くて三とせは始めまと
秘 ものよひそめあひしより三年
は始く
再 中宮は宮のまひあひし
より三年は始まり
ひと所此内にてうさしこそ
義 白文かりしそ懇切にしなへ
公界らしかりてあしかしさて

とあり
法りハ廿二巻の法蔵こさ
此方よ蓮の華をうけてさて
しるり
秘 蓮より給へこさとて法服をとり
めでれハ法蔵より右の事をい
それまへり
弁 さて汐法るりしと法母蔵
蓮の服まよりてのひさるゝ也

法うし法見ちましゝの此中り
めてとひてりしみし 一首
義 母母法此ハおつ勢め教よみりとの
法見つかしよ河をきての結
平すふと門結句事のさ母此
法説切成教てしめてさへの
めでりしも見もすかりと也
津もと所
作地所

抄 抱のうきりあることすう所く 義弁

抄 小書 朝廷事例 都して言ひあるすゞい国の守と任ていとうませられて定まるはく

すらしともあると

抄 國司に任つけらるゝや

義 受領くうやう此除目乃課役云

守に任らるゝすく

やうそれ雑気りそそめまへ清

抄 庵りは

菫のさりりそめのへきとぞ 弁

私法叢書の比より菫きらり

のよへしとや

義 菫のさき此事く

男とも心つうひしまゝに防されと

抄 まいの事あまこい

菫乃んぞあまこ又

これ迄事のと

中差此わかく

抄 たとへ抱としてかりに

涂月の後執筆中行事あり

言次に任官ある事なるを
代々しくいひなしたりしや
弄 義
河 直物 懸召或京官除目之後執筆直物を申行なり或除目以後兩三日節にても行之
先度除目参差ノ事出来時是を
すなはち直物といふや
権大納言よりなりあかりて右大臣
に任給ひ

兼の任官兼官の事也
右大臣もかいとのたまひておもくしき
してまへ新所なりけり
弄 竹川巻進のこともあるは太大
臣は紅梅なり 竹河此大臣致仕下にあるへし
抄 紅梅卿へし 竹川巻の巻
もとよりみえたり 此物語源氏
右とみえたり
義 此大臣紅梅卿へし 右大臣の

たゝね殿へ太郎を辞せの
此時の太政大臣たりし時する殿
〔一〕の薫は大納言にして
大臣を兼ねする也
よろこひ有て
薫大納言太政の若宮の裏上
御て聴しつゝありて
おほさしにおはします
中君よつりしにてせする

左大臣家二条院よりおはすの別
薫のよろこひより参りし也
そこなるときつひて、へんなきこと
みと
みよりうりしきわかしとのゝ也
れく
薫のさゝつきしうき事此時て
とゝ
おりてゐりしたる

答拜

拜賀ありしより来る人ありけれは主人
南階よりくたりて答拜揖
讓の作法ある也薫新大納言
の拜賀より二条院へ来りてあそ
束帯如くしきてお白答
いと東衣不讓して答拜あり
めつらしきためしなり
おりて見すれは花もみえしより 義

薫は束帯なりくしくて白衣
あれは下讓の作めてし
き事なりとも辞 義
はつきれくしうしてふのみの
所なし
大将初任饗の前に答
以上を請したる観ま前
ちの例一勤
私白文をれ恒下に請し

中さうこれ次の納言にさん
みのとこそとありしなんの
位よりあかりさるなり
大将のつかさともに禄なを給ふは
白馬をよせひきなきより
大饗よれあられ河海抄にあり
大将には大饗をいたすなれ
垣下なるも公卿は大将より
上の人はいたすこと 以上義

大将なりては中少将監以下は
つかうまつりて拝賀する事なり
親王公卿垣下の衆として請
伴ある也
西宮抄大将初任事 除目畢
大臣以下着議所座大将勅目
畢於射場殿令奏慶拜舞了
此間可奏饗禄事之渡南階前退出之間
近衛府候庭隨身然発物声

撤籌敍歌了時牽公卿及次
將以下出從數政門向里亭女
將以上垣下公卿各着座上卿ハ
着座外次將在明先進來以上六位
官人於庭前敍辭訖着庭
中座次公卿及中女將等座
立机相次立机食床於庭中
給六位已下肴物盃酌无算
之後被物縫等各有差但新

任大將着在里亭者引可到
其家殺賭弓勝方饗食准是
可知此日以親王為垣下蓋故
實耳勘物云大將上﨟不來
有親王大將着中將上合葉
大將初任ノ時そ其方のかね
以下を請して大饗のるを
行ふて禄をとらする也白云中心の
みこを饗食所へ請し中さる

ままやみおほくは事よせて
思しゆるよも
（三条実行）右大臣殿のしまへからまいれとて
弁　又常は大饗の例いはる大臣
ねのつきは此頭とは筆談して
志まりし文義
あんか此みこゝろかんさいさい
きさやうけはれもして
河　殿下　大饗

花　殿下の大饗とつかさの大饗
律するを殿下とは云なり
かのりとつて事を公卿ひた
ねよりも上首のゑてはむかは
さらに勧まいむかふ時大将
のつきさかりのよりの句
も殿下の庭に請しけりさて
なりとは河海に勧盃あるの例
為つきよしさるさまあらや

ちれ家より之垣下とは以下〻
し習ふことはよろこひ侍る義
おの家もゆかりのものにて
弁 なし後人は辞退し給ひ後と
ことさらのやうにし〻 義
中々事とそあるまいぞれにつり給
義 めりをたとのはらさまいてあらず
中納言の心もかはらて何ぞ文
此事 六条院にもなくあるかり

六君はまいりと聞り給ひて二条院
へつり給ぬかまとゞ夕霧にも申し給ふ
後さ回しくつるとなり
れとつくもあるめ給ひしこまりけ
秘 中納言もいくたの内女房又六条院さま
のとおもふりなりきこえ給ひす文 弁
おもしれたりてとしもなし
秘 夕霧の此権威まさに無為を背
して中納言なとと抱被押さるゝ事

ゆへ此事も有てめでたきなる
おとこみこむまれ給ふ所に
中宮の若宮（男子と）とこそみまする
大相国もよろこびまして
薫大納言大将の昇進せられて當世経
いかさま悦なるぞ
よく〳〵杯まいらせよ
白言此薫此様ぞこゝろ茂お笑
此内にもひとしらぬくてさぶらふ

誕生の悦ぞ
さてもうらやましい産織なまぞ
くちをりおかしませは
産織の事ぞ　白言ぞ
みなさいの御言乃ゆるさるたもと
白言ぞ　白此申けり
五日此より大相国よりさゝへしきこめすぐ
めでたせに
囲碁　出銭

紗

碁石のかけ物之義

うぶやしなひの時碁石をとらせあそぶなり

其のかけ物は銭をつかはす事也

李部王記天暦四年七月七日是夕彼女御産

養産婦饌衝重十六合破子食七荷此食具

碁手銭二万贈物児衣褓各五重納文佐木筥

二合有白絹畳 使大蔵丞壱岐守忠傳言云物雖鄙陋

今宮所贈盖可有意報云恩問備至恐喜兼

深況兼宮悉余折恐充極昂 纏頭細長一

重袴一具守忠今遁出門追傳報賜禄

あとらし此時まで乃はいうさ〇三十七こと乃はらい

川へうさ〇よそはむ川きするをそこにいれ

天暦四年閏五月五日此日自中宮給産飯

息所前衝重九枚両折敷朱用螺鈿有銀

箸著上例濱木酒壺如如例有男女房

饗食名用朱台臺盤高坏純金食二具皇子御衣

十襲五具唐綾 五具平絹 襁五具納深折櫃四合置中

取二脚九条右丞相記

同記云當月七夜姫君政所設饗饌息所
御前衝重廿前纁面廿數有銀筥同四
枚着上例須又有酒壷具又親王家料
廿前毎前纁廿數四枚碁手五十貫純食
立具 冷泉御誕生記也
四条抄曰右衛門府奉碁手錢歳机立御所石
坏官人取之王孫傳 使衆前置薦
新儀制 今停止之
依例或有囲碁之輿此間或府督勧盃

（裳）此事 天暦四年冷泉院誕生の
例なといへり又ゆ子うみのうへを
産婦といふ則ゆこもらと
いふ事見之
家乃ゆゝしくも世人うちゆかん於
こきゝぬうちきともにして又すま
いとせのつり
（河）粉熟 校本云今ウンザウノ様十物レ立ち河海一本アリ
（秘）點心 節會の時もちゐる 餛

飩ともいへりうどんといふ物也
粉熟ハ五穀をもちてつくる也
て粉にして餅にしてゆ
てゝ甘葛をかけてこねあはせ
くをそき竹の筒にいれてを
中よりつきいれて志たし
を押てつき出て其姿双六乃
調石のことくきりたる物
流 四位の
上

此乃おくよりまいりしへのかさ
うちおきみきりつゝせしめまゐらせ
てしらつきあすまいまいり
松のへすゝの事 花鳥西流
とるへし
七月此来ハ明さいの家乃御うたや
しるへし
明石の中宮也
ことは此文をとりしめ

秘
中宮大夫之
義
誰とてもみな人
同子も哀にしめして
義
流れなりしは師綱之
義
主上又白河の御かたの御子なりとて
流れなりしは哀なる也
大いとのゝも
秘
夕霧之
義
白河へ相かりて也兵乃義理

もとりく
御みつしも
秘
中宮之　草子紙之義
我さきおいけと紙くや
兼の名ましま御子なりともまきされ
中宮のいよし　物と紙　うらん
と思ふつゝ又白河乃御心ざしを
ましるへ以れいつよし　へらん
と思ふいふらおし　以遣とも　姫

よき張きくやうかき意は葉まり
ては見えすらとなり見葉にやん
性也
抄に月のた日あかまよみて
同月の余日廿二宮は養にさあり
て明の兼葉の余りのへなや
こき兼に作法は密儀なりよう
なきを
うこんにくしきそまつりのよ

廿二宮すい御筆にもおはすまゐ
すらくしくしおりしますれん
みく
今上に法んをみて
みらとの御むこそりかろくへむむしも
しこもおほかれとくれりに御代
まゐてくの御かりむことをり
いそうせすの子しくひすくなくや
みさむ

秘
花多てり乃人しあり
ひ
淳識宣女潔姫通忠仁公室
多皇女源朝朝臣倣子通貞
信公醍醐皇女勤子内親王配
右大臣師輔云同皇女雅子内
親王康子内親王共配師輔云
同皇女請子内親王配大納言師
氏婦生一女祁子内親王配大
納言源清蔭婦後配河内守

橘惟風村上皇女保子内親王
配貞信公處子内親王配右大
臣顕光云 保子内親王配入道太政大臣
兼家云又し貞信公非之桐國先良云
押紙ニアリ
と案是来の例皆以脱屣乃
後或ハ崩御の後ことくのめ
まかりのあふまじく在位の天子
乃御女臣下の配する事はなき

なりし讖識絜形の和かゝし
ありけるを漢胡なりいふ例
まゝあるぞ従をいふ尚すゝめ
つよきも
義
すゝろくやまゐらんとには位の時
の例近衛内門師侍如此例と
此萬葉とつゝて
私師如此例勘へし
右のたゝもめつらしかりける

人の情おもし
秘 夕霧なり
義 夕霧此萬葉の事をのまふなり
落葉宮乃みさめくの事と
みしより
こ院とは朱雀院乃御来なりけり
せ給て
弁 源氏事 義
私見いさゝか此御代よ萬葉をとひて

とりかへてを
うかれも字紙
そしらうしけうかやりりタ
前のくめかんて
秘 義 廿三字文
薫の母家廿三とかく
我いゆしして人もゆかさあ抽紙
花 花いタ前れおしく乃一条めすを
乃のふく一条が家はきてましいて

さつりしらかりて
秘 落葉字の事く辨
辨 今上廿二字此内をやゝ義
大饗婦ゆりもしめて
秘 二字乃母ゝさのおやゝく
それよりとのりともいなさく
としのやゝ乃花
義 大饗ゆまとれしへかる横はさ前
しへそと

私花は大やまと華よいりやうの
こゑか葉ーろうまりき給
さく人のむこともれてしく
出すりぬに称人しかなかとてを
口さうし華とえんぬ如へし
心乃ちりまい形見れゝ記

義 大君の事也

秘 薫のんより
まうてさせーてはつんと

秘 薫れ私人つまさまんと也

義 薫の条入のちうきさ被仰
里亭へまうりきすんとさ也
寺宮いつとむしきまりに

秘 廿三さ也
おりまるすん房ゆつり走こし
給へし

弁 廿三また也の御ーかす方をゆ
つんとと也 義

比禰へすくなし
女三の宮念誦堂之
みすおりてありけるなひこそまよ
趣きき
義 ゐおりてへ女二の宮のかたはら
のよつきとも
内みも貴りせまりて
義 慕の女二の宮ととつしまりて
さん用ことをましよ此事也

めすあまり
禎あくうらとはけりあらは猶さん
子遠は女二の宮墨亭へ塚浦のをす
いうしとの流黒楽く
心の庭をおおおしつとあん
義 きとも子代おおすあたおおす
めしとも
まく宮此流ものにしれつし
秘 女三の宮へ此勅也 昇義

古、此あまうその御事なとは

義 女三宮をは故朱雀院の御事を

勅なくしても召して主上乃

御懇切なりとも

そうさき譲ノまうふまし

義 女三宮より主上へ奏聞あるへ

いよく哀ちうしめへ支

く風人こそれきこ御心なるに

主上女三宮をゝ御中如へし

心此らふかしとにられしくも

秘 叢の心中也し

義 女二宮の御事もさのことにて

うらめ如へし

宮此まう衣のいふなるのみ

注 五十日或百日御餅事

天暦四年八月五日儲宮降

誕之後當百日依世俗例

供御餅 朱小御 甚臺六甚臺御

巳節乾菓子四種巳上銀器
二基唐菓子八種二基餅八
枚一基木四種以上成平盤
九条記

花
子誕生の後五十日にいかといふ
百日をもゝかといふそれより後は
ありて餅をそなふる也
且是祝ことしゝさかし事
ともなと

義
細工ともすゝくれ心くく
心のなしみやあれへいまなすら
おもしし

秘
菓のなきなゐなり畢をとうすとも
ありうえかれとれ此歌中にて
いまはさりともむつかし

秘
中老の心也

義
菓のはむてふなり畢をなと
みをなく心やすくて異面しなく

哥七

あはれしるはきこしたまへは
深くみえて

義
薫の袖は大君乃事なりと忘
れぬさまなり
心よりもいつかあまりしらん

秘
薫は詞なり
女二宮へ参りかよはすとて
あいさらなくとそ

義
ことのは心なり
いとあさましお御事なる

秘
中君は詞
人もこりをはつかりきて
わかめあをもて御へりすゑ
忘れかくとなるまらんころなる
さらに

義
大君の事なりと忘れ給はとん
よそにおもはるゝぬかく中君ゆゑん

ありのまゝなと
おもひあへすは
秘 大君のゆへ
箋 中君此こと縁
まゝありさまのやうにもそらしやみ
なし
中君の心も大君のおほせは云
君の事をおもひやりに此二文の
事とそおもひ人とむらしやみ

なしとは中君と大君とをもの
おの同しきてゆへしと云
訓なり
うちとけもそてやうなる人と
秘 中君の我身白文ならぬを
下後悔の心底もすゝめはす
みゆかしと
箋 大君の薫にうちとけさせし
此浅き時なりと我身まかせて

中君のおもはせ
よりなき事ひとへにまつけてうし
みられしられれは
義
薫の中君へ心ばへなる事を
おもてきこえぬ事なきに見え一けり
の恨とはおもへしこそかなれ
薫の心より女かうしとの中
君の心也
めれとしてはしゐさせてあ人おぼす

なる事なきにみくちをとらんやは
私
君の心めでたのむしさる也眼さ
くいうた事なれ也 弁
私小出ワツラハシク心カケ端
事コツムツカシケレ乙ハニク
ケニ憎てん（中事）ニモアラ
ズシバニクカラズモテナシテ見ん
セ奉リ給ふ也
花とやうみ物かたり

弄
讃をいてすまいあられ何とも
なく拙つゐとく成とも
まり拙みくみまかりしく
義
薫の子なりかりしありとさんて
やうの事ふかうていて世中ふと
まうり心れいそうあめかりとうかの
のこうへりし覚えすく
世のこうなきなれかうく
秘
左心たうしかくしとも

さまてしつみうひうく
秘
つみうひうくい大君之
義
大君乃世なりたちしてやう
の子なれとあしいう秘しうへ
しとも
おもゐしけうすのはあうりま
秘
六君此は股なりしといひ里いさう
とも
義
女二宮をといいつしもたやく

此子はそてまりよしとは葉ん
のなかいそられぬと也
秘乃義あやまり
あまりすくなき言葉の心なれハ
義
りやうふかゝす葉ん此ほんにすく
きやうもるれられとい草子の
詳也又此次も一段葉んのなを
詳ニ久れなり
かくめしし給らけてまゐひ

かすま
む
見ハ物語ゆくへの葉乃すゑ
いつ也
解
めししいめしし又
義秘
秘
恵階草子此頭也ほんも沸
綿んしいめゝりゆりうみなら
めとも
義
まゐひなすまい葉ん此事哉
あしくつゝやう如しや

まことしきかこのけん代にて
義
薫ハ此模様を今上ハ此物語ノ
所ありてしそはむこまかし
のみかんへ言てし貴命よう
おいすらんともしかるへし
とも又此道まて弟子縁く
かくおさ所きこれと代
義
薫ハ代もやくみをすへ有を満
心なりしはすた

くれめきは東代よりしかくす。
あまりきこを
抄
廿二になりてまりあるへきと也
おとし此人乃けりなりいや
義
薫のすみの暮ならしつり
とう代ての也
私薫のすみ暮つてきまつり
ともみとて此趣なてとり
一とのりうう句ひをうけりや

おつまつまはとういつやうな
たりつまは紐より包く様のも
ありとやらよ筈の備
文なりしかは三条文ふさうちかく
なりぬめへし
（秘）萬葉とは方角のつとある文
（義）季ふさりとて四季なりけれ
王相（ワウサウ）とは正月寅より次中勘

卯月つゝみはせちぶとり
節分四月節也
四月の節まつあさなりし三条
言なりまうりまちへ武是
（義）廿二言三条文へ流まうり此事
四月の初卯月乃節まつあ
さなりとゝ文
あれとての旧萬つかなりらへまさ
らせ給て萬乃む此ゑん勢さ

せしめ玉ふ

秘義 花鳥西宮をひきたり
廿二日は菫の皇亭　三条文殿
は右ノ日於飛香舎ニ藤ノ花見
藤の花乃宴あり河海にも
延喜二年の例をとらず花宴
又は天暦三年の例あり安和
の例をとれる舎ていひ物語なりいれ
りとかは天暦三年翠の此潘をと

奏す延喜は年ある花をいひ
物語なりとかきり

河 飛香藤花宴事
延喜二年二月廿日御記曰
此日左大臣於飛香舎藤花下
有献物事左大臣執献物
称菅根朝臣執贊可為御息所
宣旨別當也而後別坐藤
花下盃酒数巡後左大臣殊

御右大將人々獻題目飛香舎
藤花和歌則左大臣置御硯
邊奉平䟽邊覧獻攝筆和
琴其攝筆箱是兼和筆物
耳酒盃同奉群臣酩酊管
絃哥舞亂呂數因親王備前
介忠房令吹笛曲給禄群
臣有差

西宮記曰天暦三年四月十二日
於飛香舎有藤花宴以殿上
御倚子立南廂有毯代南二廂東
一三三間卷簾垂母屋前立
四尺屏風二帖敷信乃廣莚
中敷毯代立二帖倚子南簀子
敷同莚同簀子中間以東敷
疊公卿座當庇中之戸南立
五尺障子其西在酒具赤
漆火炉一口有黒漆臺同机二

前其上在満心瓶今作金銅
杪件鳥入御酒銀御銚子一
口加土器臺盤炭取當公卿
南前庭敷紫端疊四枚其
南敷二枚殿上人座御掃
部寮今敷軒廊東小庭
疊二行西面北上樂所座未
剋御出召右大臣次諸卿
參上次侍臣着座四位北六位西位南

供御膳具諠雑時朝臣牽
五位六位自南庭西界置物
御机二基立御座西橡木作
在木蘭地綺敷物所但木御
折敷四枚立御机上淺香
折敷沈裏以金銅し枝葉色
唐羅花文綾敷在心葉藤
花圓組木件組折敷一各
四加牙象臺表紫檀裏蘇芳

在銀筋供膳 折敷二枚以撥木作
忘憂草紐木札青四種生物二物
盞坏以銀作土器 以黄土塗之
供之陪膳退下給臣下衛重
供御酒 銀盞維時朝臣 供之伊予取銚子 給臣
下給 義方朝臣 二献餛飩臣下
大臣奏因召采所別當中納
言源朝臣令召采人別當仰
蔵人召之采所参入奏調子

有哥事 立文臺ヲ南庭 立置物御
机置之硯紙給臣下献題 維時
大臣奏准延長例地下人一
両献哥召庭燎 月光明也 献哥
伊予取文臺右兵衛佐清正
講之左近将朝成蔵人頭雅
信朝臣書之地下献哥者源
緒方藤原兼家藤才有時等
労等之源哥 大臣取御製

召公卿侍臣堪哥者奏絃并
大臣納言渡西大臣取御杖
源朝臣取和琴 講進御前
奏云延喜御時和琴講云源
朝臣本稱物名授以為人置
和机琴出纔彈御箏家被
聽昇殿 大臣芸雅 賜祿 納言女裝束 源中小袿襲
四位白細長 大臣綾御衣一襲又
以女裝綾く

菊はひさしのみをおもくに
こそあり
む 天暦三年記ありみえたり
おほし此家乃つきはありて給ては
作らす
弁 廿二家の法はありいおほす内
よりれし
秘 作歌しの家い廿二年七十宴い
並上より此歌法く

右のおとゝあせられし大納言
む 天暦三年右大臣師輔公為
云りて上首
弁 夕きりも右とある本はけり
秘 古本右とあり花鳥天暦三年
右大臣為上首ことされとも是は
左なるへし夕霧の事なり
左トアリ
義 夕霧に 左トアリ

弁 按察は紅梅に似たり但其人ことく
然にて抵悪案
私按察は紅梅兵部卿の続事
未た何りしるし此事しあやまり
而もありて又夕霧左大臣は
勝する時紅梅右大臣となる
夕霧を多く右大臣となさは
に常更紅梅按察ゝの義
大臣に十分見

菊中納言左兵衛督
弁 舞の鬼見
秘 舞楽太臣の息左兵衛督も同兄
弟兄 義
私左兵衛督トアリ舞ノ息ハ右
兵衛督兄但て陰秘義ゝ義也
三ヶ条
秘 白菊之 弁 義
むら菊之条

弁 同中納言
私云家ゝ之
南殿乃菊の色めりしま菊と人
のさりしより
花 天暦三年 南庭 菊花下賜
近臣座 義
むらむらにてんのきんしりかく
そめくてめして
む 天暦三年 行幸 東 殿楽

所座義

私此調こうらいてんと云ふ

不審なるつかみてくの家あまれ

後涼殿に上面おはしますへし

古本こうんらうれひんかうしと

いへるをこうらいてんとあや

まれる歟へしてる尋

宮此内とよしかもと定なれ

てさせまへか

廿二ヶ条之秘

たとへおかり

夕霧以下文

内まへてりとりつて

義

うつるちを抱きてききまさすく

こ六条院の内にて侍りし加賀まつい

て入道の宮より寺にせ給し

きんの女ごくりんえふのえさ

をりつきこうつ成

秘

大道ことハ女三ことくきんのこと琴
乃譜之

箏

薫の集らせらるとく霜此より
つきたるに此例 花鳥にあり
延喜御門勤子内親王に語り
まひし箏譜を九条の太政
桐りつたへりてたまへしを丞
ねの息女あ子中宮号蒼華
よりまはらくて村上の天皇へ奉
まひし箏を云り

河

琴ノ花譜五巻 雑琴ノ百廿巻見
在書目六

義

うやまりの抄をいまた此枝よりつく
前之太郎乃抄をいひ三巻枝は
流けておりをいひまり奏する
やうく

苑

天暦三年右大臣捧先皇賜勅
子内親王箏譜三巻左衛門

篳執奏笙一管 元貞保親王笛之
左近衛権中将螺鈿筆一面 元貞観王物有奇音
奏者執之今案天暦三年
前斎宮女御安子ハ九条右丞相
女也延喜帝門ノ内女勤子内
親王なり猶又也まへ筝譜を
さそまつりけるといふ也此物かたり
は京の院の女三宮よりさて
まつりけるし琴此譜またき
なせ給へり河海抄にも此説あるも
みえたり
朱雀院の御物ともなりけり
是ハ薫より此まゝに乃今按
又朱雀院より女三宮へつかはり
て薫へまいりの物とも伝へし
笙ハ此蔓なりつくへし
む 柏木此柏の笙之
秘 柏木乃笙之義

めそはせまいらせ給ひ

今上の御てならはせまします是

大将のはなやかなるまゝに給ひける孫

のありけり

義 義光はつくし乃笙をもて伝へし

て吹しけると也

はしめにつかへまつりける

義 郢曲にすくれたる義上人也

宮のれうにとりおんすゝまいりつる盤

給へり、

花 天暦三年沉香折敷四枚紫

檀臺以古黒様銀黒染内者

粉熟有赤漆火炉銀銚子

寛治五年万寿元年天盃

用瑠璃御盞

かれもしこのろらしき

信 義村流并義

きろのよはやしき

ぎ
銀様器　或茶器　親行説
あり此流さうりあり
花
万寿　寛治の例アリ
色ハしハ元ありて
秘
名義抄云金翅鳥印穀畏神
得之出賣与人或名緋瑠璃
釈名曰緋含也青而含赤色也
光清猶ハまりありて
光乗猶ハ舞思此息云々

義
天暦例如此
辞
夕霧此天盃を毎度たまはり給
ちりのまよひを辞しまかり
家達ハ此子たまこいハんや薬をゆつり給
ためありてハきんたるし　頼包
し
む
夕霧此ためし云郷　めん上首
ありて毎度盃をはしめまいらす
なりよりて此度ハ信次とみ

くゝりて天盃をたまはるなり也

秘 天盃を毎度上首よりまいり給を
親王達の中にはいつもさきとて
たまはりゆへあり
あくりやまへと
夕膳此盃をゆつりまいらせ候事
乃斟酌あると也
内証しきもいらぬらん
天気も事へとやありつらんと也
ともとのまへあこいつらい

賜天盃例

天暦七年十月廿八日菊合式
部卿親王童明賜天盃寛
弘四年四月廿七日密宴中務
卿具平親王賜天盃 以上親王例
永延二年三月廿五日摂政六
十賀摂政 法堂殿 給天盃 永祚
元年三月十六日朝覲行幸御堂

殿給天盃寛弘三年三月四日
行幸御堂殿給天盃
同五年十二月廿日後一条院
御百日御堂殿御盃 以上給執
政臣例之
今案此後万寿元年宇治殿嘉
保三年京極殿賜上皇御盃
寛喜三年光明峰寺摂政永徳元
年室町殿行幸鹿苑院大相国

御給之也 為後学以次書之
事しといふ事河海の説皆今
案也一向よりしるす事なり
知まきらんをかしきつまとせよと知
さらんをいふとしすこし略をこゝろえ
知やと孔子の格云ものをも
志もしくはしとしく見故云
如へし 但永延二年三月廿五
日小右記云摂政六十賀大殿家室

左大臣起座獻御盃右大臣取
御銚子自上給御酒盃於摂政
此間被仰壽言　或者云万歳千秋
摂政又召舊奏之　可尋
記摂政下庭中拜舞之
名此例もあきらかならすと
つかは祝ありつきさうの事ふく
まやありしんさうすり
河
進會　日本紀廿七　宴し給

粽唯とみえ
秘　不分明事之　弁須さす
義　不知りく　河海說無之り
ふ知しらく
きよみみ明しらく
みりこれ清むこふくめてなや
しりよ日たれはおしてとを
けりくし行かりて
花　天盃をなま時は古點をめして

此盃に酒をうつし入てのむ抄也
我のうつはをさしくし
とは云飲をはりて後うつはる
の隨よりくゝりて此あまむかひ
て舞踏して庭より下り
侍く也成定まる作法也
秘
盃乃凝濁をうけて天盃
をは懐中するも別盃成
さしくしとある也

昇
天盃をは給ふかうつはけをとり
よせてうつしくゝるかも
さし同云天盃をは土器のま
すうつして飲よと云事わりや
一勧とうつはけよ後濁をう
けして飲ちまをは此こと
つゝも
同云天盃をは給ふ時定れる
礼りや

一勘晴の时定紀文
古記ハましてはじめたりして
河
漢書曰女子公主注曰如淳曰
公羊傳曰天子嫁女於諸侯必
使諸侯同姓者主之故曰之
公主百官表列侯所食曰
国皇后主帝姉妹曰長公主
正三位源朝臣潔姫者嵯峨天
皇之女也天皇選壻未得其
人右大臣正位藤原朝臣良
房初叅之時天皇悦其才操超
倫殊初嫁之

ことり毎家清ありしことり清奇経
へ家
秘
河下座
位次あれいて

あせち此大納言いまたわかくおはしける
めもらん
弄
誰ともなし　紅梅のふた
あるへからす
私此おに弄　紅梅如へしと
あり此義可然
秘
誰ともなしとみて　紅梅此大
臣如へし　右大臣ともきこゆいま
きこりさらにかしこきかなや

私紅梅の義可然なり　廿二云々
まことをあしく人はつかうけもの
へりとす　紅梅は故致仕のおほ
の宗稽ころ人あれは似たる
乃事人又声のよきゆゑ
なり
義
紅梅如へし
これ此家乃北母御をきもし
弄
父大臣の家なり　松となせし時

鈔
姫へし　義
蒼葉の女御に文母より梅窓大
納言の心ばへ也し事なし
姫へし
義
さていふをえこそまつらん
後よりは此女二宮より字をとらせ
しとぞ
私云梅大臣の年齢をもとへ母
女御より心ばへ也し事にあれ

應せさる兄
人々は常にちかきかたにまうでゝ
義
富世女らき人々にもみしらるゝ事薫
乃事を梅窓は知らしられ
しらぬ類也
時乃みかど
主上は在位の事をとりて
たりし病と蒼ちかれ
私薫の女二宮へ通ひ給ふより

と云こと上此は歌をときこゆるを
云歌はおもしろくもなき也
さてはえせやうなるや
義 歌はえんのなく
さすかゆゑし作者は
義 梅家の心中をしる
志そらしてうたもしらぬまつる
天暦三年四月十二日記云此
下一通献哥召二庭燎月花也

義 献哥上とあり
天暦ニ作文あり 晴清哥なり
とあり
如む毎いのりとなり
抄 草子此なり
あやしけりつかぬ花うりきん
詩句ともつしらぬ事也
如へしといへる也
うき此まらもよそふさて

15
貴一とつよ心を二ツかまへとあ
るまじき事なるべし
弁
上の町とつよくて下の町成
べし
義
上つかた北の町如へし
上町乃しるしなり一貴人の外
族姓ゆるさるゝ事なり也
とぞ
大将殿此御消息を折りて

抄
うへの御消息をもちて紫の
萩花を消息は葉のおり
てそもつる事なるへし如へ
し奇の細かき此やうの事
其草子紙の如へし
葉
葉つけ貴人の消息に折りと萩花
・とよゐ枝より袖をかけて竹
秘
・とよゐ枝に二ツをそう
弁
此奇は葉のく・とよゐ枝は

廿二字の事よりけり　前つぎの
此廿ありとぬるらけり
（義）主上の御為なれはとちはゞ枝葉
能をうけて本をまもるが法
なるゆゑ下此心は廿二字は法
事也
うけたまはる義なるべしや
（秘）歌抱みしらるとぞ
（義）草子地之　理運なり　歌物に

いひさる批評すとぞ
（寄上古製）よろづ世かけてまかりん花なりとも
（乃）ふともいかなるとしてそみゆ
（行）飛香舎　藤壺　延喜御哥
（新古）かくてこそみまくほしけれ万代を
かけて匂へる藤浪の花
（幸）主上此御詠之
（秘）御製之行末萬歳如へいはれとも
まれにふもあさきうとぞ

箋
霞は花もあらはさぬ物そしよ又

夕霧のうちに
来ぬらしとめおもつかはしいむしきれの

やしよおもしぬ花はきりあり

河紫
むらさきの雲とそ見ゆる霞のむ

いかなりやとも乃そうしなりけん

花
拾遺集延喜の御時霞つけは霞の

花みんとさせ給きはあり霞よは

そのことも見つつまかりけるか

読人 霞 藤原國基

霞は花郎のしらかむらさきの雲

かとも乃そ地しおやきされは前か

抄
川寄霞花郎のしらかい――

夕霧は寄なりへし

弁
誰とも作者なしたた大臣しや（夕霧く）

箋
夕霧は寄る人々きたのきしきこと

桜家大御もし
よのつねはえとしみてす雲井まれて

ものかりけり霞波のむ

弁
さよとやちしらいーー　桜家

大納言此哥といへるこの心
雲井まんてきのかうとよ紀家
（義）薫乃事を忘へ哥ふくめり
哥此詞よこゝのへにはなちかれ
つゝます薫ちりたる風よし梅
家の薫んをさそへ里人しよす
ありかき心見薫波のむとは
知へし
むりことにりや

（義）ゆし哥をむり事なと申さり
まや此うへめつらしく松り
こゝろしもなしとて草子紀之
あせらもむりしすくれまつり
しはこゝの
（秘）紅梅比へし
私紅梅大臣此人日來を
みしより
（弄）撰此事紅梅より似かよりこし

義 但為人々にて候 私以上巻

御後はよしよはれよりも難波のよき事

あまりに而はまた此梅宿紅梅

なるべし

右の大将は紅七郎はよしはれなく

義 夕霧の息 某圏には童はあり

て頃にやりまに今上は廿二

宮厳の宴しなひし時筆

の東宮東宮さかりし人へ七郎君と

ありしところ

私某圏には男子は八人あり

是をそれぞれ母られとも

なし

ゆる

義 次夜をまふへ

ゆらつきさやかりてそらて候

あひきなり

秘 古字沸文

よさらめみこさらなりいうへきり

親王になり給ふ勅許ある也
殿上人にてそれ〳〵ふハ宮に出仕
ことなり
殿上人楽所の衆なるハ女二文字
よりなるを務めける此れも皆
古事ありと也
秘 女化ハ所いハ女二文字と
文字まうてさ陪へそをまつり行けり
義 それよ御内りいおん日 舞宴あり
て暁還御やそれ夜明ての夜
女二文字三条宮へ渡御也 殿上
えんの御あそび夜の事也
うへの女房されしう
禁中祗候の女房大概也を
くりかへ有と也
ひさし此車ふく
義 庇御車よ女二文字の警護之車
乾さしかき気〔卜〕毛

(河) 庇御車(ヒサシ) 糸毛 金造(コガネツクリ)
檳榔毛(ビリヤウゲ) 網代(アジロ)
おゐはくるまつ
(秘) 車はきりのふねといへり
(拝) あしろ人はふねともいへる
也 様同義
はむくのひとつ車
(拝) 葉よりは通也義 出車(イダシグルマニ)
シユツシヤ

本所(ホンジ)のくるまのせそ
(秒) 薫よきはむくるま
心尾をしくうらうけてみえてまつ
まゐらよ
廿二家を薫は黒亭ふるくん
やをくゆんのふき母を
さしやかりあそよ
廿二ははさ母をいふりちいさきめう
さくらて第さかれ人と申ゆ

をみしこれ是つれなくしてそ
義 大悲の事也此廿二ケ年つりしく
もろこまきれぬく
私 此世あそいなくさみのつゐこさ
慈悲のあまりなる心也
仏となりてしそ
義 仏となりてて三明六通をえて
我身は方生も大悲との宿
縁をもあきらめさせ也

てらはつきはなりにき
義 宇治の寺也
流るゝせきふみなし
西は阿闍梨の寺はくりしと
方よりあり
まいのちもまはりしに
何 弁尼の事也みしくれのちら
末為ゝの寺は心也
弁 法師もりかふち紙かりて又

秘
宇治宮へ渡りのゆゑ也
おい
あり弁の許へおはり
私おもはしきつの人ゟ手紙をとやと
同し本と心をときけ給にか
おしさ

養
芝ハ八宮の旧跡を
なほさ御なりしをいふするま
いふ宮は此所にてしく
世くつれ此世ともしきさ御なりしハ
おとぬ

養
浮舟は此おりかし来ありしを
かうまし両あつけ男
常陸介かつまりにくま也
更いまりしくて
薫ハ弁尼のもとへ立入のまへ
いみた
これ宮とさして
此車も八宮此ゆかりへ来る也

ぐやしとつみ残せつしまいて
けい
うし御売や
弁
かゞやく
蕙の制しまゐらす
義
しらしゆきにる花
ありしたよ家りける給ふ
ひらり此せんりとの
義
常陸前司 おきさ陸奥かり
任をさ返し

おいやきし十人おき里と見えし
いでて
花
おいそかりと了心さる事あり
とつみ見
秘
領納しまる手習の恩顧へ
し
義
蕙此うきこ船あしとより合すまる
小ぞおそたり明んと
秘
さおさいへもまらしまる

義
蓮はことこゝにかけすると人可
いたせる叉乃を紀て沸論んとを
つきこゆなり叉蓮といふ物つま
人すいむしせぬ事あん
はともせ人も
義
蓮の供せ人　弁
馬ともし見さ弟あとしつて
了候川　遊縁
遊ある叉ひそとさるゝ叉
おのしん気かきこめしいめて

弁
あつしし作事かも
秘
形遊きれ足
義
此形遊いりけ作きあとも　み
えは
はそれ女遠きだ
私は歌の鳴足　衣乃音は
秘
すりもまり ぬの音あしれずる足
下りはりいぬ手りをく はれへし
な候しはりめれのゝきり

お紙しきまでもけしめ紀乃
りさまをともめずらしきへ参る
いふみもありて
いおもはる人をとられそとふて
浮舟也卒示ありめる
さきさそれとあかいする
義 にはすか人いこれそと弁尼の
つくへしみ姫へしと
ゆめそめ人よまへありと

義 此事を浮舟そこと薫也推し
てくれそれてうんさき給へり
ばんは薫のおはすとかしらせ
うとうまて弁尼あり宣ひて
而也
まらうとといものしまへかしとう
ことり
客人いあまたともことうまそとと
や薫とも志しきめさ

まうく人のあるましきおりて
浮舟はみのそひたる人々集へし
はせんのさなよりかこれはおもはれたるまし
てそらやすし
義
は御前といふさき二母北のかたまゝさう利とも
とも随ひ侍しておもふなるま
共此もろくてま写してハ此
車よりさ紀へまうしつる女房ハ
様体もやすしとそ

抄
ともにあるへハ京なれうさ母也
み おもひさるへいまむとよりおりて
見ものをひさるへこ
まやうとつふう
おもはれひさるへのつ女
あやしへゆかいさる
義
見いう紀母北車のうちみそ
まいのはこと

これも知ところ人の心也
いはこれおしはかるべきそこと人紙
座りて
あしはまそ人のうら紙をもつす
人は力たしと斗心かたしてく
いふん紙やりてとつふ之
注まけけよ知りゆを
うきこ形は扨人のみる人肉と閑
是心のある也

おそやりしあてならぬとも以也
よく拘里り出し従ぬへし
秘
大君よ似より
むまいりつませ侍く
兼の心也
車は家とりおりて家もてもつり
こう紙
む
是なりよりて女は車　にあり
めの時はうら様とつてあそして

車のあを板といへるなりけるさ
す物也
秘 廿車ハ車のあをつくりより青板
とつくる物なく松ふし中
やさしりハ此用意なるへく
けし 弄
いとくらしけれはやみて
河 山見（ヤマミ） よくしみる也とそ
箋 遅桜はおそくさく花也遅桜まて

おりまつし物さる也
こまかにまよそてしこゆし松か
しきおもたり
箋 浮舟の衣嚢とこれは紙也
まうきいろ花こしちまう
河 若苗色
花 うすあさぎのすこし青まさる
萌黄色はまへのある也
やさしくかみよりこゆる

義
四天の屏風かきたる所上よ里
薫於見ゆる也
あはれとさ侍りしも哉てう
うれ毎於神之
さもくれしけりけ里流しそうつ
抄
人のはゝし也
いつみ川の船よりも
江
泉川
木津川とはいふ日本紀ニ挑
川とありつるを今是云ふ
也崇神天皇の御宇と戦ありて此
川を中にて挑戦ありし故也

都にいそく言ふところ於京にいつみ川
河風さむし衣かせ山
遊舟コナワタる　文選中ノ二
聚
人くはゝ江とも湖も古川川の
みなと也く
義
深次の神之
ふかすもなる也
木津川は多於紀ゆ時から
うたかはし

あけぼのをおりへはいつこかおろう
ろうらん
秘 東國の道を里へは南部の家
といやまれと文 義
始ありしてくろうしと里かうしす
峯よりまさ弥へおりつ二人の
こゝろく
義 志ゆいとともせて
すと文 うれ安之

山多氏はしいてさうかまあしかり
秘 ひさらのお目かむすめなかしうま
へくもなしと文
おりしけなかれても乳さち度なれ
つへくも
義 ことさら無のさ母愛仏の世なしと文
くいなしと文
やうしつこ二歩まて
葉のさらすゝみさう後

まつ花へわするゝはしや
義 始より車よりおりゝへ文
薫の匂ひをきゝとなさる文
高人またにおはれぞゝれ此物也ん
りや
二度めに車よりおりる也を
あひなぬことありし人御出
天下はいかんし貴とし茶した
ちもし如とあまりをそしき

抱乃りい
義 天下テンカと讀へし文字を
私あめかしきゝそても他へ貴気
豈陰國よそ春月此陰ゐと
あいせし薫物もやみむを
おりさぬきしとのへ
すきぬく如すると打いほまと
弁尼の盛なる梅なり 衣裳
なとめきつく 貴と此女とも

めかもりのなるを葉はたしかみ
なよ〳〵と
掲けし白かな
抱けし白かなと義
これ肌とおつらせて
らさ抱なしとまいれとらき身を
起すと
志そきなへと又枉りしく
退

おりしくなるは葉はこのき給
へと又ゆりしく妙そのなくと
これよ満さらきこは
葉のすくれさらんをみあつ給ん
さら心よもけしもんはと白なも
なれふこるいとあやしくむつ
しと
おやろけなして
かしの華みくは葉はんと白かな

華よしと文

あま君ハ此度の御ゆるしこゝろも

薫の御らくも御せうそこ戸

されとさみ女くての乃うき

強さしアリて只と御休息あの

とやしろ文

此君銭さつゐまわり市に

うれ母と薫此さつねやくろ

まひしの文

見くらしのふやしと

弁尼か推量文

御けし此あつかり

御居領

薫の知りしらみの一御のあつかりや

うらけさうしてまうしと せんかい

こにまさうま

弁尼のうきこ再其小事面するを

かめつみかはしそく

む 弁の尼君はきこゆるきぬいみじう
人はなあさう幸上よみしきま
秘 なまはしあつまへ人は何あさう事也
いとうれしうなりて
秘 さいやうふ也 弊
此ゆおかしうなんと
尼君は頭也 治渺より 此ゆ
ここよ事りある（一本）のま也
此君へいとあやしく

義 此君へとは浮舟君也 つきこと
つましし おとなおとなしきこと し
人こ
事さもむこにはんらうまめして
河 言朔（ムゴ）
尼朔も可貴心也とおうちもなき
とて心也
いよいよおれ弁つつ
義・ う 此舟君は母也

すはさうかくれめこれより
いとよしみゆ
秘
弁とさつ家とて薫のそれ
のよりくへしきところ也　弁　義
秘
大君なり　義
これをとりよつけて
義
浮舟ゆへなり大君也猶く
思ひ出しりしと也薫の心也
尼君みれつくへしらするか

うき舟の親けちいひて
家のはかなさもいとゝくなりかり
と也
秘
中君よも似たる
弁
中君よも比うたる中君也似たる
家也
私きこゆとは薫也也と申
へ家神の似たると也
こ読よりよら物しうん　貴

もの
芝よりもくさりたる木は人あり
ともゆかりあるわさなるへし
芝は見るなれはましてとも
志ゝまさりてまつしきうれしと
故は家の字のうちにあるへく
詮なきことしるへし
まことに二字の字にしる
られたるは家の字子とる

人りしめてかたしらるゝ
世中におかしけれ拙きこと
弃
薫の心
秘
大慈よく似てきは世なりおかい
しけりともいひうしさと
や弃箋
おもらいまそとつゝてらんこれ
う
貴方をつゝて
ゆ
取金銀銅合各折其半授使

者日為我謝太上皇議献是
物尋旧好也　長恨歌傳
秒　はゝきりの字心あるへし　は
金釵をとえて候かの心をきりも
あれのこと重宗の里にゐるし
とうかりしこ物へし
義　かうみかりとらんし　重宗の
ほんは拙花菓なりるへし　是は
かる人おもてをみ中かしもう　似

これはすくさめ所なとし　所り
薫の心也
人乃とくあつかりを
義　尼君は薫の句をきうしきて
のそれのかとかりてこらと
を孝一かともいもれほて命わ
用意あるさ母也人の中とう物ん
つりとはあつき人ともようきゝき
物の香かりなしとうしのと

はそれと申すについて

義 薫はなりぬきさ舟のしうさ

孫の申のなしき給支

ありさ為すと

うきさ舟はさ舟と乞なり薫の

とひすふすり

浦てさあひさ給

まいれ其星さ支

り此亥こし事

義 薫の使しられ船此舟ーと弁か

御下さし事く

志ありおもせこと待しのらか

秘 弁ーり詞

おをいゐて共此君はしれ

古宮は浦かてかしてゐしと支

かうしけるれはよらへ

義 大君此姉りなとく御のありかれ

匂宮の事とられ弁此母の

ゆゝあり
花はしるべはいかなとゆかりしおかりし
まはもとし
秘
廿二文へ薫のさかりすかし
附たる也　異義
色はしほあひを
大君は昔あくまいと也　又た
文ともなへしと也
かはゆく君はさけられあつて

浮舟の母常陸介か妻也
いかくおりしもすとも多ふかれ
義
薫のおりしもすまへなとも見
をあなとゝ也
升なるひさう人ともなり思ひやは
まこのありきも見へしとそくら
かめつれと
秘
薫のはうこゝ紀んすひしや
此事すふあり

むかしをとめすらんといひけりしん
やまとく
義 名や乃次ふし弁なりのゆへなり
これ毎かりうまていふ却ち忠安しとそ文
ものつけまいつれおしなりの地きる里
なりとそ
抄 弁か祠
箋 かくとりれしおもきくしにかよふやと
しけみをとけてうなふを尋ぬる

河 夕されハ聲よ呼なりかなるれ
かゝりなてつきよにに気
口 鳥名のまうく志い鳴声のしれ
口 筆よれ移しけるさまをまするに
声のにに鳴かゝりれ也てそ
いくいなりしく志りぬへとも
毛詩云流離(リウリ)鳥(フクロフ)少(ワカウ)而好(ヨミ)長(テ)而
甚醜(ミニクシ)
此故なり梟鳥也一名鵄白鳥とも

いふ也、
或説云杜若をとらよ花と云
は花にはく此多く故かきつ也
又八雲抄云かき多くは春日山にま
まありかきつ悪する物也といへり
よりきたるしをそ悪すといへり
まなく忘はなく春の時也と
いへり源氏物語にもあり是
とき多るを定家卿なりとは

不知しとふ排らく出にけり
くし多也　但未決
秘
業の哥也心は在大君鉄忌花
さらにありて似らを翁あり
くまた　と葉数も曾し
かと数りしてふりし人何家
へ貫れ出との花くみ婦り
まらは大君まよく　似より
折はさしりて物たもいひ

始りて程なくもとのきしに着
きといふ所にかゝりけり
みしつゝけて行すきにしあとをと
よくかへりて見
魚鳥此沢にある事久しく只今川
くしき事などいひけり
夕されはのへより帰るなるかなの
し　是は大君よりかゝり
やとなかし程をきなかゝ

こと聞えしのやまもとめぬるへきとい
ひてかうけり
弁尼の浮再君まかりなるを

弁花奥

うつしなへるかゝるかゝるかん
さしなて
中君此事

私云清少納言枕草子歟
ひのおましのさこにたものゝかいゐ
あしをとりして弟ちからゝをとし
くとゝのふ聲きこゆ

東方朔傳

董君之寵由是日衰至年三十而
終後數歳竇大主卒与董君会葬於
霸陵是後公主貴人多踰礼制
自董始

武帝姑館陶公主號竇太主
如淳曰竇太主云ゝ女
也師古曰竇太主
堂邑侯陳午尚
之主寡居年五十余近幸
董偃始偃与母賣珠爲事偃
年十三隨母出入主家左右言
其姣好主召見曰吾爲母養之
因留弟中敎書計相馬御
射頗傳記年八十而冠之
義曰若ひしこ若くとらめつけ

しら之紫衣なり

昌平坂學問所

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan